詩文學研究

第二輯

1938

京東

詩文學研究會版

詩文學研究

第二輯

1938

詩文學研究　第二輯

一九三八年春季版

エッセイ

戰爭と詩……梶浦正之…七
知的問題……ポオル・ヴアレリイ…一四
續詩の思想……淺井十三郎…一九
續アド・リビタム……鹽野保男…二九
シュル・レアリスムの周圍に……丹羽哲夫…三六

詩作

聚雨通過……木下夕爾…四六
蜩の家……最上八平…四七
蛇性圖……細川昊…四九
黃昏の表情……渡邊曠彥…五一
或る出船……西山五百枝…五三
自畫像……堀口太平…五四
東洋……萱原信之介…五七
淵……羽田貞…五九
秋近く……奈良進…六一
貧しき歷程……桑原貞子…六三
暦を剝ぐ海鳥……島田磬也…六五
山と雲……樺澤友佳…六七
憤激の水邊……丹羽哲夫…六九
若き區劃の中で……池田日呂志…七一
鳩と永遠……浦瀨白雨…七三
作品……安田吾朗…七四
石器の街……津瀨準…七五
茶筵……梶浦正之…七六

譯詩

鸚鵡……エルネエスト・プレヴオ……七八
踊子……ポオホル・ジヤン・トウレ……七九
帽子と祕史……ジヤツク・デイソホウル……八〇

詩作

群雲……熾木由美……八一
風邪色……長谷雄京二……八三
空の色……小池亮夫……八三
青い空氣……小林正純……八四
書室……竹内一……八五
法城……渡邊和郎……八六
猿酒……八乙女猿助……八七
相常住……吉野多美子……八八
無軌道市街……國廣勝太郎……八九
白き臥床……津坂霞……八九
金鯱怪盜……武藤和夫……九〇
鷗……丸山吉三郎……九一
裏街……梅澤恒夫……九二
青銅色の紐……宗武爲康……九三
流れ……小松茂彦……九四
微笑花……大山敦五……九五
傳習……小田邦雄……九六
六月の海邊……上松ちか子……九七
仙臺にて……伊野亨二……九八
風のない部室……田中國男……九八
十月と樹液……吉成糸子……九九
追憶の糧……牧博美……九九

貝殻低唱……江越馨…一〇〇
吐息……沖田廸…一〇一
氷菓子……春山章郎…一〇二
堀に立てる夜景……亀井義男…一〇二
ひととし……入江伸…一〇三
橇鈴の鳴る夜……鎌田安雄…一〇四

批評

詩書管見……梶浦正之…一〇六

詩作

榎木浩之輔……田中林彌　松本祐順　藤浪里子　花山正也
加藤銀一　大橋勝利　紀幸子　加藤静夜　野田久子
青木顯　加藤嘉保　垣しげる　渡邊中
消息……一二五
編輯後記……一二六

戰爭と詩

梶浦正之

一般に戰爭は詩歌と相容れない性質のものであるとなす論者は、詩は觀照的態度の所産であり、戰爭は最も切迫せる現實、人間の生死の努力である。故に生活の基礎動搖し各人を當面の生死の努力の渦中に投じ觀照的態度を保持するを許さない戰爭に際して詩の出來ぬのは普通である。戰爭は最も切實にして逼迫せる現實的經驗ではあるが、この故に戰爭は詩の最も恰當なる題材であると斷ずることは出來ない。總て現實の諸相は直ちに藝術の材料となり得るものではなくして、之に作者の主觀と選擇と統覺とが働いて始めて藝術作品が生れるのである。戰爭は余りに大きな經驗であるために之に對し吾々は選擇と統覺とを充分に行ふことが困難である。故に一般に戰爭は詩の適當な題材であるとは謂ひ得ないと述べるのであるが、戰爭文學を否定する詩人は大抵以上のやうな文句を羅列する。乍然、想ふに藝術は常に必ずしも觀照的態度の所産のみとは限らない。切迫せる現實的事變や人間の生死の努力や生活の基礎動搖それ自体が詩に表現出來得ないといふならば現代の詩人の大半は完全に何事も歌へなくなるであらう。作者の主觀とか選擇とか統覺とかいふ方法論が、戰爭その他の切迫せる現實問題を歌ふ場合に充分活用出來ないやうでは詩の畑も頗る心細い運命に存在するものである。

要するに左樣な態度を固持する者は特種な抒詩人の一傾向を示すものに過ぎぬものであらうと時代錯誤的な親切を附加して置かう。吾々は尠くとも、詩人を圍繞する一切の自然的乃至社會的現象を自らの境地に迄呼吸し、そ

の詩生活は社會全体と聯絡され得るやうな詩法の發展に多くの文化的意義を認識するものでなくてはならない。民族と民族との優勝の覇權を爭ふ戰、其處には常に「正義」なる言葉が双方に濫用される。デンマルクの思想家ゲオルヒ・ブランデスは謂ふ——愈々戰爭が始まつた。いづれの國も「正義」を叫ぶ。しかもその「正義」が國々に依つて完全に對立するのだから奇妙だ—と。詩人にとつて之の烈しい大きな現實的事變が無關心であつてよい筈はない。吾々は戰爭の現象を詩の對象とする以外に、戰爭自体の本質的洞察をも、併せて檢討すべであらう。正義の何者たるかを靜かに考察すべきである。戰爭の目的は種々の場合がある。或は自國防備のため、或は主權と獨立のため、又は威信のためなど。勿論、その目的の過半は經濟問題に出發する場合が多いのであるが、必ずしも人類の物欲のみに關聯してゐるものでもない。

文學、特に詩歌に携はる者は、その過去に於て戰爭に對して頗る簡單な觀念を抱いてゐた。過去の戰爭の鼓吹者亦は讃美者は大抵、戰爭の直接原因が宗教に關する場合に多くそのペンを揮つた。かの十字軍の戰爭の如き、戰爭それ自体の目的が宗教にあつた場合は特に其の例は甚しく存在してゐた。

現代でもポホオル・クロオデルやシャルル・ペギイなど加特力的の熱烈な信仰から勇敢な聖ジュヌベエエヴやヂャン・ダルクの行爲などを想起して詩を書いてゐる。

乍然、余りに露骨な經濟的事件を冒頭から標榜して起つたやうな戰爭には、讃美の歌をものした詩人は尠なかつたやうである。それは何に起因するかといふに、詩は魂に關する問題をのみ引き受けるものなり、といふやうなユウゴオ式の觀念が詩人の作意を支配してゐたからである。

神よ、地の底までも戰鬪をやめしめ給へ——と祈願した過去の詩人は宗教的立場から嘗てこのやうに戰爭を歌つたのであるが、之は余りに單純な見解である。人類愛の基調は勿論平和であるとしても、平和の絶對的持續

れ自体が、暴力的行爲の前に破れた場合、平和は反つて暴力の是認となり、人類愛の本義に添はない現象が生れて來る。人間性の美化は最早現代の詩人には通用しない事實である。

世界大戰前の反戰文學は、人が悲慘と害毒とを蒔き散らす醜い鬪爭を憎惡したが、その多くは單一な宗教觀念に立脚してゐた。

翻つて大戰後の戰爭詩文學を觀るに、これらは物質的な文學思想の洗練を經てゐる關係もあり、詩人の觀点は頗る變遷して、その多くは戰爭の總体的性質から詩作してゐる傾向がある。

戰爭に直接參加した國家は學者の思想に其の信念を置く。かの大戰の火元、獨逸はダアインが其の本國にあつては純粹な適者生存の學說とされてゐたに拘らず、ダアインの學說を純粹性から分離して戰爭の必然的現象の基順としたのである。レツシングとかカントとかヘンデルとかゲエテなどの平和主義者は明かに無視されてゐた。竟に獨逸は「善い主張は戰爭を尊くしない。しかし、よい戰爭はどんな主張をも高貴にする」といふニイチエの言葉を自國の戰爭道德の標語としたのである。新ドイツの標語が「戰爭の神聖」であつた如くファシズムのイタリイは正義の暴力を讃美した。更に「聖戰」は戰爭道德觀念と宗教的信念とを相關聯せしめた資本主義乃至軍國的國家の金看板である。

イタリイに於ける熱烈な愛國詩人ダンヌンツイオ、彼は歐洲大戰に自ら劍を把り、亦飛行機に乘つて六七年間も創作の筆を放擲した。之は作品の問題でなく、詩人が戰爭を地で行つたものと謂ふべきであらう。

彼の有名な「カルナアロの曲」は大戰後、自ら義勇軍を率ゐてフイウメを占領、竟に各國をして獨立を承認せしめた。一九一八年二月十日、ダンヌンチオ以下卅名の決死隊が三隻の自動艇に乘りオオストリヤのブツカリ軍港を閉塞した際を歌つたものである。

われら數ふれば三十名、運命に依つて「死の神」あらば、三十一名ぞ。
おゝ、エエイヤ！「死の神」よ、アララ！われら數ふれば三十名、その身を置くは三隻の粗殼笹舟、
甲板に張る三枚の板の上、その膽力堅く、心臓堅く、皮膚堅く、更にその額も堅し、その手は機械に似て、腕は唸る

「死の神」と肩並べつゝ、
エイヤ！　カルナアロの肉よ、アララ！
三色の護符に身を淨め、われは祓拂ひ、
腫れたゞれたる傷口にも似て
血膿の紅色、燥け沸きかへり
腐りゆく綠色、肉を裂き、痛ぞ強し。

同じくイタリイであるマリネツテイ一派の未來派詩人は、戰爭の讃美者ではあつたが、其の藝術的立場に於て其の起因が根本的に相異してゐる。彼等は藝術の新らしき美學を創造するために、靜的美學より動的美學へと進出し、戰爭とか快速力とか爆音とか、さうした力動的な事象を禮讃したに基まつてゐるのである。

佛蘭西のユナニミスムに屬する詩人ルネ・アルコスが歐洲大戰當時に出版した詩集「他人の血」は人類愛に基礎を置いてゐるとは云へ觀点は頗る物質的（マテーリアリスツク）であり、亦戰爭の總体的な行動に着眼して歌つてゐる。

三百人の佛蘭西の工兵が墓標の十字架作成のため、鋸で樹木を挽き、鉋をかけ、それ等の材木が何千本となく各戰場に運送され、船でサロニカやアフリカへ、亦アルプス山系より英國海峽までも荒漠たる原野に立てられる光景を極めて冷靜なる態度で歌つてゐる。

同じくユナニミスムの詩人ジユウル・ロメンも詩集「歐羅巴」に於て、戰爭を怪獸に喩へた新らしい觀点を以て、群衆が自分達を食物としてゐる處の一種の悲しい怪獸に氣付いて、一日も早く、この怪獸を追ひ出さうと神に祈願するといふ表現がしてある。これなどは現在冷酷な軍閥の犠牲となつた支那民衆の立場に似てゐる。

英國に於けるリアリズスの詩人ジイグフリイド・サスウンは歐洲大戰に從軍したが、戰爭の慘禍が人類に痛切

な刺激を與へ、それに依つて平和の分岐点が種々な角度から望み得るやうなことを述べてゐる。

ロバアド・グレイブズは戰爭の當面の現象を、素朴な牧歌調と比喩して平和の讃美を歌つてゐる。

キルフレツド・オホエンは「不思議なる會合」と題する詩で、戰場に於て敵と敵との珍奇な會合を歌ひ、これは實戰の現象的な描寫を主眼としてゐる。

日本では明治以來吾々の詩なるものが生誕した之の形式を以て戰爭を題材とした作品は皆無と謂つても過言ではない。勿論、日露戰役當時、所謂新体詩の定型律で、英のテニソンの作の飜譯詩や歌人詩人に依つて作られたものが數多あるが、これはすべて軍歌であつて本格詩ではない。頃日、二三の詩誌で戰爭詩の研究のやうな文章が掲載されてゐるが、それらは皆一樣に軍歌と本格詩と混同した評論で問題にならない。

今度の支那事變に際しても、所謂軍歌の氾濫は屢しく、事變突發して二ケ月以内に百以上も作られたと謂ふから驚く。勿論、皇軍の士氣鼓舞といつた現實的な軍歌作成も詩人として國民として重要な仕事ではあるが、吾々の藝術的信念に基く本格詩も是非之の際創作する氣力が肝要である。

今度の支那事變を題材とした詩を手もとにある二三の雜誌から一讀して見るに、多くは失敗の作で、河井醉茗「林檎」（日本詩壇）兵糧窮乏に林檎の木を配した点、一派の新鮮味を盛つてゐるとは謂へ、それは唯素材の魅力のみで充分な迫力を示してゐない。しかし現在の戰爭詩では佳作に屬するものであらう。福田正夫「陣營」他一篇（日本詩壇）は素材と角度が常識的で宛然軍歌に等しい駄作。「七銃士」はイタリイのダンヌンチオやロシアのブロオクの「十二」のスタイルの傾向を帶びたものであるが之も失敗作たるをまぬがれぬ。白鳥省吾、「歡呼」（日本詩壇）は出征見送の村落軍國風景を歌つたものであるが客觀的角度を以てしても中學生の作文程度を出ない。

北原白秋は「戰影二篇」を（中央公論）に發表した。「狙ひ」は「しづかなり夏空、大皇軍の我の眞上、畏ろしく形無きもの、風をはらむつかのま。」といふ第一聯を以て始まる戰場の現實的な描寫に、天地創成の往古に胎動する戰意の暗示等の主觀をも述べてゐるが、描寫も角度も既に古典に屬し、ことに最後聯の「どとと射つ我か、彼か、このたまゆら、勝つ者の正しき狙ひ、神のみぞ知ろしめすらむ」の如き常套的結論の表現法など明かに今日の詩人ではあり得ない。「熟眠」も實踐感を顯はす意圖のものであるが、文語体の、しかも白秋特有の古語復興的發音の技巧が縱横に走つてゐるのみで、机上の勞作に老骨となつて時代に逐ひ拔かれた之の詩人の悲哀が讀者に映ずるのみで問題にならない愚作である。

次いで所謂中堅詩人の戰爭詩を一瞥したが之等も老大詩人等と五十歩百歩で、いささか之の國の戰爭詩に悲觀したのであるが、唯一人無名の新人八木橋雄次郎の（鵲）に發表された「胎動の歌」といふ戰爭詩に感銘を受けたのが、せめてもの欣である。全篇約四十行の連續描寫で、戰爭の現象的な現實感、更に文學思想の急轉換が之の現實的な一大衝動に依つて刺激され、各々の立場の位置方向に狼狽する詩人達の態まで巧な比喩で歌ひ、聯想の飛躍も言葉もすべて新鮮で佳作たるを失はぬ。此處で始めて今日の戰爭詩に出會つたといふ次第、次に轉載してもらふことにする。

レンズを叩き壞した風は
更に文士の髪を吹き上げた
秋は川波を立ててやつてきた
其處此處に白兵戰が起つたのだ
森のざはめきの中で
政務官は鳩首會議を續行し

標悍なスパイが
枝から枝に身を交した
國民は百足のやうに働いてゐる
ふところには夫々決議文をしのばせてゐる
うつかり前に出た塵留漁りの男は
遙か下流に押し流された

相場師の受話機を投げ出した音で
ねずみが元の穴へ逃げ込んだ時
高射砲が地響きをたてた
放たれたリアルは見事に花を開き
砲煙はバツカスを窒息させ
破片は落下して灰皿を叩きつけたので
文字がそこら中に氾濫した
おゝ　すばらしいダイビング
而かも彼は水面すれすれに再び飛び上つた
あれは飛行機である
あれは拍手ではない
ガス管を掘りあてた支那塹壕兵が
砲身だと思つて喝采したのである

浮袋につかまつたエンゼルが
べそをかきながら流れて行つた
水葬マーチが合唱され
二十世紀のセンチメンタリストは
慌てて喪章をとり出した
坐席券を紛失して
切株に腰かけてゐた主智派の詩人が
戰利品貨物自動車で出發した
彼の荷物はフォルマリンで一ぱいである
大陸には燈火管制がつゞけられてゐる
機關銃は明日の抒情詩を歌ひ
探照燈は高粱畑の波を青く照らした

現代の詩人が現實的に人間性の美化誇張を拒否するとすれば戰爭といふ現象は人類の生存する限り何等かの形態を以て行はれるであらうと豫測するに難くはない。そして吾々の詩作態度が意識的心理狀態にあつても何等詩藝術の手法そのものに非難を受けない時代に到つてゐる今日、戰爭の如き切迫せる現實は詩の主題乃至材料とはなり得ないなどと謂ふ亡者に就いては最早問題にする必要を認めぬであらう。

戰爭、實に斯くの如き鋭角的な現實問題こそ、寧ろ吾々の好素材である。たとひ、詩人の思想觀点は各自異つてゐようとも、よき戰爭詩の生れむことを希ふ者は敢て筆者一人ではあるまいと思ふ。

知的問題

（書翰体）

ポオル・ヴアレリイ

漠然として浮動し來つた之の巨大なる言葉にて小生の夢の列車は鮮やかに制動機を懸け申候　唯一つの言葉に依つて頭腦中に衝突事件を惹起するが如きは滑稽の極にて候　こは嘘の集魂が全速力にて突如本線を脱する如きものにて候　知的問題には答辯も亦何らの表象も無之候　樹木、信號機、野原、城廓、煤煙、等背後に飛び去る水平線上の大らかなる立琴等を小生は全く別人の觀点を以て自らの中に注目致し居候　小生自らの想案に蹉跌仕居候　これ觀念の骸（がいこつ）に圍繞され驚き居る体態（ていたらく）に有之、正氣に戻り候ては之の災禍を惹起せし彼の大らかなる言葉の既に顚覆し寸動も許さざる姿態を認め申候次第にて、恐らく彼の言葉は小生の思索の曲線にとつて稍々長きに失せるを覺え申候　知的問題……之は恐らく小生の角度に位する方には何人にも了解し得らるゝものにて候　乍然、御承知の如く、小生なるものは、頗る晦渋難解な精神の如き存在にて有之、貴下には經驗乃至は風聞により御熟知の事にて候　世には學識人情ある明朗型の方々多く、彼氏等は既に、かゝる精神に就いての佛譯本を小生に讀述するを切望いたし居候　彼氏等は、小生が彼氏等に混亂のため一讀を推めたき旨公言致し候處の小生の詩を引用いたしなど仕り、公衆に發表し、亦訴へ居る次第にて候　尚訴へるのみならず、他人ならば隱弊すべき處を、彼氏等は、ある個所が不解なるを以て指摘の華やかなる名譽と存居候「乍然、審判なるものは思慮深く且、用意周到なる裁判により決定さるべきなり、自己に不解なる事を一般人の異口同音の思考に依つて之を悲觀する理由とはなるべからざるやう」とラシイヌの飜譯いたし置れし或る個處に於てカンテイリアンは申居候　勿論小

生にとつて、かゝる光明の愛好者等を悲觀せしめることは苦痛に有之、唯小生の魅力を受くるは明確性のみにて候　扨て之の明確性に就いては、甚だ遺憾に存じ候へども小生には明確性を御高覽に供するは殆ど不可能事にて候　之に就き小生は貴下に極く入念に申上く可く候間、決して御他言無之やう絶對内密に願上候　光明とは小生にとつて全く獨自のものにて世の何處にも發見出來得ざるものにて候――特に考へる人、書く人の境地には存在不申候――それは宛も遊星中のダイヤモンドの如きものに候　世が小生に與へたる暗黑の如きは小生が殆ど到る處に發見せる暗黑に比すれば余りに空虚且明朗なるものにて候　完全に自己を理解し之と協同出來得る人達は幸福にて候　この人達は安易に讀書快談致居り候　宛も水晶の世界を太陽の光線が易々と朗かに透すが如き樣を想はしめる仕事を運び得る聰明なる方々を小生が如何に羨望せるかは貴下の御賢察賜はる處にて候……更に時折小生の意地惡き意識が小生の味方となり、かゝる人々に攻擊する惡智慧を唆かし申候　探求せざるため暗黑に出會はざる人々多き故先方の熟知せる事柄のみを當方より提出すべし。と小生の意識は囁き居候　乍然、自己の根底を充分吟味せば、偉大なる人々の言葉が至當と思考いたしたるが間違なきものかとも存ぜられ候　理解ある自覺のなき時は、その理解が正確に理解せるや否や不安なるが如き不幸な精神、實にかゝる精神にて小生は作られ居る者にて候　何ら反省の余裕なく明瞭なる事柄と確實に不明な事柄とは小生には全く識別困難にて候……之の弱点こそ、まがふかたなき小生の暗黑の原理にて候　小生は全ての言葉を信用不仕候　言葉自身の世に信用され居るからくりの愚かしさの如きは、いささかの考慮を拂へは容易に發見出來得るものにて候　人は言葉の有難さにて思索の空を調法にも渡航致居る次第に候へども、かゝる言葉は深淵の上に拋げられし行く方なき薄き板の如きものと窮極に於て愚考致すに到り申候　狡猾に行動する人は、その板に依つて助かり、いささかにても執拗（しつよう）に摑らんとする人は忽ち板は破れて深淵へ轉落するものにて候　之は早急にある人が理解せしものにて候　鈍重は禁

物にて、明確なる議論も曖昧なる言葉にて編まれたるものなることはやがて明白と相成次第にて候
扨て、すべて、かゝる事から推して、魅力ある識見が演繹出來得るものに候　甚だ御迷惑には候も一應御聽收被下度候　一個の文字は之文學にて候　その根底までも穿鑿しては相成らぬといふ事は文學の嚴格なる法則に有之候　更に之の事たるや一般の祈願にても候　彼方此方を御展望被下度候
小生は自らの深淵の中に住居仕居候――小生自らの深淵と雖も他の深淵と何等異るものには無之ものにて候――小生は自らの之の深淵の中にて、何人も何等苦勞せざる之の知的なる言葉を、童子、野人、天使、更に小生自身にさへも小生は何ら說明出來得ざりし狀態にて候
小生にとつて影像は何ら缺如せるものに無之、むしろ小生の精神に對して、この畏怖すべき言葉につき質疑を發する都度、神託は異なれる影像を以て應答致せし次第にて候　何一つとして之の不可解の感覺を拭ひ去りくれるもの無之候
小生の內部に夢の破片は群生仕居候
小生は自ら「知的」と總稱する多くの影像を作成仕候　こは所謂、不動の境に於て偉大なる運動を惹起せる人間群像にて候　或は活力滿ちたる手乃至口の動作が、知覺不可能な力、又は不可見の事物等を、明瞭に顯示しつゝある潑溂たる人間の像とも申すべきか……愚生の僞はらざる發言を御寬赦被下度候　小生は自らの眼にてしかと見しものを認め申候
思想家達、文學者達、科學者達、藝術家達――すなはち、多くの原因、生ける多くの原因、個別化せる多くの原因、微細なる多くの原因、自己の裡に原因を所有し、しかも之は自ら說明出來得ざる多くの原因――現實的には自らの希望次第にて、その結果を空虛にもし、愼に重要なるものに相成る如き多くの原因の群にて候……實に

かゝる多くの原因と其の樣々の結果とが型造る世界これは、存在しつゝ而も存在せざりしものにて候　多くの奇怪なる行爲、異常なる事象、更に多くの生產物に充ちたる之の体系（システム）は、强烈なる現實性を帶びて、トランプ遊戲に類する如き暢氣なるものは何處にも無之き次第にて候　かの靈感、思索、製作、光榮、才能等の如きものは各人の見解に從ふて相異るものにて、或る人には最重大事に映じ、或る人の眼には殆んど不要なるものにも認めらるる次第にて候
扨て、小生は天啓の微光に依つて、惡魔の全世界が醱酵し混亂する狀態を仄かにも見聞せしと信じ申候　「歷史」の上に起る一種の喜劇が非現實の天空に出現仕候　鬪爭、徒黨、勝利、堂々たる瀆聖事、死刑、暴動、權力を繞る悲劇……この「共和國」に聞える音は誹謗電雷に似た運命、電擊に衝つた運命、姦計陰謀の音のみにて候議員の人民投票、無意味なる戴冠式、言葉に於ての多くの暗殺、唾棄すべき盜事に就いては最早申すまじく候すべて之の「知的」民族と雖も吾々知識人と何等異るものには無之候　淸教徒も發見出來得れば、相場師も、淫賣婦も、不信者面せる信者も、信者面せる不信者も有之、僞れる正直者、本當の低腦、當局者、無政府主義者、更にインキの点滴する刀を帶ぶ首切役人迄も有之候　或る者は自らを牧師と自負し、法王なりと思惟し、又は豫言者、シイザア、殉教者などと自負し、更に稍々シイザアにも似、同時に殉教者にも似たるものと思ふ者も有之或る者の如きは、そのすべての行爲に於て自らを婦女童子となせるものも有之特に嗤ふべきは、自己の元首を審判乃至判決者に拍造せる人々にて候　自己を判くものは自己の判斷であり、自己の弱点なるものは、他人を判く態度の裡に最も簡單に暴露するものなることを、彼氏等は何等疑はざりしものかと思はれ申候　すべて、僅かなる過失の責も敵性に負すも何等支障なしと謂ふ如き技術は危險なる技術にて候
この惡魔達は各々の紙の鏡面に向つて自分等の姿を寫し申候　そして各々は存在の最初のものなるか最後のも

のなるかを凝視仕候……漠然と小生は之の國の多様の法則を巡禮仕候　瞞着の心要、生活の要求、生殘の希望、驚愕、憤怒、懲戒、教示、輕蔑を與へる快樂、嫉妬の棘なるものは之の「地獄」を操作し、燃やし、加熱し、說明致居候

小生は其處に小生自らの姿を認め候　それは尠くとも小生の書述せしものが既に作成せし小生の不知の姿にて候　夢想家よ！　卿等は夢の裡に於て、何らかの機會に、見たるものと知りたるものとの中間に不思議な調和の生誕するものなる事を知れる筈なり、勿論、それは夜ぴて破れざる如き調和にはあらざるも。小生はピエロを見つゝ有之、しかも彼はジャツクなることをも認め居候　扨て小生と雖も時には他人面したる自分に氣付きし事も有之候　さらに正氣に返りたる時は必ず語るべからざる苦痛が小生の心を貫通致候　かく申し上げ居候處に依れば、小生は、幽靈か小生か、このいづれか一方消滅せざれば思はしからざる如きかに存ぜられ候……

旅の終りに、種々の色合を以て小生を混迷に導く之等すべてのものを、貴下に御讀了願はんものと思惟いたせば、實にかゝる程度の述懷にては到底終末を告げ得ざりしかと存ぜられ候　漆黑の汗を滲ませる汽車の停車せる時、一人の頑丈なる英人は無遠慮に小生の足を踏み申候　この書簡に終りを與へしは彼の足の賜にて候事を申すべきを忘却仕居候　　匆々

（"Monsieur Teste" M・K・抄譯）

詩の思想（承前）

――主として「批評」を中心として――

淺井十三郎

批評の本能

われわれが全体的に社會生活をわれわれの主位におくならば科學と詩の精神に本質的相違のある可きものでなく只その活動作用の相違に過ぎないことを知るのである。（第一輯詩の思想參照）

詩活動（ポエジイ）の科學に對する相違として科學が分科的に展開するに反して詩は部分の總和でなく全体であることは誰しも認めるところであろう。即ちこの全体を僕は先に主知と呼び直觀論理と呼んだのであるがこの領域は詩が批評であると言ふこと再言するならば科學の作用が事實的批判であるに反し、詩のそれは全体的藝術批判即ち價値判斷である事とともに科學の領域とその作用を異にしてゐるのである。

人生の科學として、社會生活（精神生活並經濟生活凡ての現象を含む）の進展の方法としての批評の精神は、凡ゆる現象を通じて文學藝術の中に重要な位置を占めるものである。

われわれは思惟と經驗の合致を以つて眞理と呼ぶ、この一般妥當性のごとく、白い花が白い花として認識されるには只狐立的なる個人の創造に依つてなされる個人的心理現象ではなくして、白い花とされに至るには甲乙丙丁にも同様に眞理される普遍性を持たなければならない。勿論それが個人によつてなされる限り、この意味は個

人的意味を除外することは不可能なこととしても、この場合一個の白い花は甲乙丙丁の全的生活に規定される現象とみなければならない。然て甲乙丙丁に於ける判斷の心理は批評の本能とも呼はれ可きものであろう。この思惟と經驗の合致は對象に鋭く働きかける批判が強く作用してゐる結果に外ならない。われわれが容易に白い花を白い花として斷定するには、幾多時間的にも經驗を繰り返しほとんど無意識に白と判斷するに至るのである。

われわれの藝術が個人によつて製作される限りその人間性のものである事は否めない事實であるとしても、一個の白い花が甲乙丙丁の社會生活によつて規定される現象であるが如く、われわれの藝術もまたわれわれの時代社會生活によつて約束される社會的現象である。例へば一個の文字をとつてみても萬葉時代と現今の言語に於けるが如く、依つてもつて製作される文學の形態の進化を知りその進化の原因をさぐり得ることが出來るのである。

（言語の歴史性に就いては細川昊氏、時代語と詩歌に就いては川口治洋氏、第一輯に述べてゐることなども藝術が個人的天才のもののみでない反證を示してゐる）

われわれの社會生活に批判が如何に重要であるかは日常生活の凡てがそれである。

批評が人間自然の本能でさへあることは小兒に就いてみても充分である。選澤判斷の作用か即ち批評なのであるからである。本質的な意味に於てわれわれは批評をまた社會現象として考察し、この批評の精神が科學にある時は事物を事實的判斷として存在するのを見、藝術に於ては全体を生命として主知され、價値判斷として存在するのをみるのである。

然して我々はこの社會生活の嚴たる現實の中にあるが故に當然ここに生れるところの批評を方法として文學藝術に求めることの重要さをおもふのである。人生の科學として人生の批評として、生活を生活する意味と意味との方法として、われわれはわれわれの文學藝術に秩序ある批評を求めなければならないであろう。

生活のための藝術 社會のための藝術 ＞ 詩と社會に就て

われわれはわれわれの本能の中に批評がすでに本能であることを認めることが出來る。そしてわれわれは社會生活の行程に於てこの心的要素と社會生活（物的生活のみを言ふのでなく凡ゆる現象を生命あるものとして我々に對する一切の關係を意味する）との間に起る矛盾交錯の諸々雜多の觀念に秩序を與へ、尚且つ他にこれを傳へ以つて同感を得ようと努力するもののあるのを知り得るのである。

實に詩はこの具象的な表現に出發するのである。

或一部の學者によつてなされるが如く本能は決して單なる反射運動ではないのである。われわれは生物の有らゆる心身の活動を本能と呼びたい。反射運動が何等の意識も伴はず只その結果を意味するに反し本能は意識的であり目的意識をもつてゐるのである。

先に白い花を例にとつたが如く生物の進化の最初に於てはその如く主知によつて行はれ、反履と遺傳の結果われわれは何等の經驗も俟たずして目的に合した動作と判斷をなし得るのである。

例へば生殖の本能吸乳の本能の如きまた目的を自覺し意識的であるのだ。

われわれは今これを詩に就て考へるならば青春時代が最も詩を生むに近いとされてゐるのをみる時、性と文學との關係が如何に本能をめぐつて錯雜滑走してゐるかを知ることが出來るのである。

實に本能は選擇、判斷即ち批評によつて馴馳されたるものなのである。

かくの如くわれわれの本能に就いてさへ批評はわれわれの心理現象の中に重要な意味を以つてあらはれてゐるのである。

個々人の生活は絶對的孤立では存在し得ないが故に藝術もまた個人的心理にのみ賴らる可きものでなく社會的生活の上に發生し發達して來たことが考へられる。

ヴントが藝術を社會的心理の產物と解釋したことはわれわれに手があり足がある如く、社會生活を全体として其の一要素として藝術を觀察することをもの語るものである。

批評の精神なくして如何なるものに如何なる進化があり得よう。

われわれは詩に批判的精神を求める。

詩がまた一つの社會批評でさへあり得る場合も考へられるのであるが且つてマルキシズムによる人々によつてなされたが如く、物質生活をのみ社會生活と解し藝術を徒に政治的巧利性なものとしてのみ位置づけることには承認しがたいものが殘る。

勿論藝術が物質生活に制約され基礎づけられることを全然否定するものでなく、藝術は物質生活に或程度のと限定を與へられながら、又他の諸科學並に道德、時代精神ひいては個人的な特徵等に影響されながら藝術は藝術して質的に展開する批評の本能を持つてゐるからである。

われわれは廣い意味に於て藝術も他の諸科學と同樣社會生活を構成する一部門としてみなければならない。

全体の中の一要素として藝術は存在する。全体的社會を目的としてわれわれが生活するならば藝術もまたこの

全体を目的とし展開するものでなければならない。

詩が精神の自己確立の努力であると言ふも、詩は對象を全体的統一の展開に於て知ることにあると言ふも（第一輯十三郎詩の本質參照）これが故である。

かくの如く本能の批評性から考察してみても我々の生活（廣義の意味に於て）は個人的なものでなく社會的なものであり全体としての社會生活を目的してゐるものである。個人はこの全体の中に全体と相對的な意味に於て甲は甲、乙は乙なる自由な獨自な質的發展の可能性を持つものである。然して個性は全体の展開の關係としてその重要さが認められるものであると考へられる。

例にマツクス・スチネルの個性ある思想（個人的なアナキヅム）を考へるならばこれは全体との關係に於てその重要さは認められない。新らしき個性とはつねに全体生活と相對的關係のうちに發展するものの創造をさしてゐるからある。

これ等のことはわれわれの詩に就いても言ひ得られるのである。即ち藝術は生活を離れては無意味であり、現實性なきものは社會生活との關係に於て甚だ輕き意味しか持ち得ない。藝術が何等かのため（意味）にあることはわれわれの「全体生活のため」にあることを意味してゐる。

このやうに考へるならば生活のためでない藝術なぞあり得ないのである。

超現實主義と呼ばるべきもの或はダダと呼ばる可きものですら、製作者の生活のためでないものが何處に存在し得よう。只全体社會生活との關係に於て如何なる關係にあるかが問題にされればいい。藝術のための藝術の意味はその全体の中に於ける藝術。獨自な特徵—藝術をして藝術たらしめる—の意味に意味づけるが正しいであろう。

かく全体の中に於て藝術を藝術たらしめる努力は廣義に於ける本能による批評の進化、主知に外ならないのである。

萩原朔太郎氏は「詩の原理」に於てこれを主觀と客觀とを對立せしめることに依つて説明してゐる。「即ち生活のための藝術はイデヤがその生活の目標であり、規範であり願望される一切の理想であるのだ」と、然して表現は生活のための第一義的な仕事でないと言ふのである。われ〳〵は生活のための意味を生活の關係と解釋したいのである。この現實に基礎をおくならばこの現實に何等かの理念を持たないものがあろう。藝術を第一義としないことはその特殊性を抹殺することではないか、只、徒に宣傳や巧利性のみを强調するのであつたら何もわれわれは藝術する必要はないのである。全体的生活の中にわれわれは觀念し、意味と價値との展開をみようとする。その全体との相對的開係として藝術のために藝術するのである。主觀と客觀とはわれわれにとつては全体的なる統一即ち主知として存在するのであるから、唯單に生活することが藝術であり藝術することが生活だと云ふ生活を狹義にする藝術のための藝味の意味はうけとりがたいのである。

われわれは全体的社會生活に對する藝術の關係に絶えず批判を繰り返すことによつて、藝術の外在的乃至內在的な質的發展を藝術それ自体の中に最も具象的なものとして見出すであろうことを知らねばならない。

批評の意味と性質

批評的本能はまた創造的本能にひとしい。僕はまた白い花を例にとろう。

この花は白いと言ふ時われわれはその知覺對象であるところの花に存在する諸要素を分析してゐる。そしてここに起きるところの作用は「これは何々を意味する」ことを意味してゐるものである。この場合われわれは未だ何等の對象を形成してはゐない。赤い花の意味は白い花を見て赤いとは知覺されない、この意味の作用は知覺の上に構成され、赤い花白い花の關係の判斷は分析によつてくるところのものを全体として綜合する。われわれはこれによつて白いと意味された對象白い花と現實に知覺されたる對象白い花とは意味を通じて合致をみ、はじめてこれは白い花だとの斷定が出來得るのである。菊をみてダリヤであると誤解するが如きこの不合致に外ならない。また小兒が甲乙丙いろ〳〵の品物を與へらるるならば、小兒は全く本能的に口にそれらを持つて行くのをみるであろう。一つの經驗をとうして或物を選び或物を棄てる。かかる心理的發生による系統はとりもなをさずその心意の活動に從つて生長し批評的方法を知性の端に至るまで構成するのである。

かくの如く選擇判斷——斷定の批評的本能は過去並に現在の討究の上に何等かのものを加へるであろう即ちここに創造の意味が考へられる。

詩人とは即ちかかる創造を最も偉大ならしめて藝術するものの謂に外ならない。然して詩人は人生の批評人であり創造人であろう。

われわれが今かく藝術が又一つの批評であり創造であると意味して藝術に對するならば、藝術の批評は批評の批評である。

今幾多の詩雜誌に就てその作品の批評として書かれたものに就てみるにそれ等批評と呼ばる可きものは余りに印象的な感想にとどまつたり、所謂あらさがしと仲間讃めの範圍を出てゐない。

結極、詩の批評性の欠除でめり詩人の無批判的な無理想的な結果に外ならない。

詩は決して外の部門哲學や科學等々のものと全然離反してゐるものでないことは、僕は第一輯に詩は一切を主知する精神であるとして記し今批評と創造に就いても考察し得たのである。

詩人は詩人であるがためにより以上の思想を持たなければない、もつと大なる主知を獲得し創造的でなければならない。もつと批評の生活者でなければならない。

現在のやうに詩に批評的精神の無力と混亂の中に今一應詩——文學藝術の批評の性質を一通り考察してみるのも決して無駄ではないであろう。

われわれは先に批評の性質を選擇判斷であるとして必理の分解をこころみたのである。文藝作品を對象としてわれわれはまづその言葉と言葉の意味を知ろうとするであろう。即ち解釋と呼ばるべき第一段階を踏むのである。（歴史的解釋傳記的解釋批評的解釋等々對象と創作者の關係作者と時代との關係等の事實を明にして、われわれは批評の第二段階にいたるまで、稍もすれば偏見と獨斷に至り勝ちである説明的解釋からまぬかれて來た。）

我々は解釋説明の次に最も藝術の理解に重要なる心理鑑賞に入るのであるが細目にわたつての分解研究は全体的把握ではなく、藝術作品に於て全体と言ふことは部分の合計とは異なるものであることはモルトンはじめ幾多の人々によつて指摘されたところである。

モルトンに依れば全体は部分の相互關係によつてなりたつものであり文學研究の内面的部分を構成するものは文學批評の本領である詩の精神及び其作用の追求であるとなしてゐることである。

われは種々異なれる角度から作品を分析しその作品の下に横たはるところ原因とその進化の段階を作品に於ける内面的なる詩精神とその作用關係とを兩組織しそこに全体としての統一の作用を作品からわれわれ自身に求めるであろう。即ち作品を一個の統一体として味識するにいたるのを知るのである。然して對象の確たる把握をなし得るならばわれはそこに對象の精神と技術を明瞭ならしめて統一ある味識の作用に一つの方向が與へられるのを知るのである。

われわれはこれら對象全体の意味を分析し或は特色を明らかにし、對象の力的作用美の本質への追究、作品の中に含まれるところの一時的なものと永久性のものとを全体と部分の關係に於て明らかにする等もまた批評の仕事として理解するだろう。

尚この心理作用は右の味識の働き即ち鑑賞だけにとどまらしめないで判斷の階段にのぼるのを知るであろう。そしてこの階段は理性—主知—を裏づけるところ階段でなければならないのである。この際われわれはわれわれ自身の中に趣味として判斷の標準をみいだすか外的關係の中にその標準をみいだすか、判斷の心理は決して一にして終るものでない。僕はたゞ正しい判斷は實にわれわれの健實な詩の精神と圓熟した經驗豊富なる知識によつてなされる創造への道をたどる批評の批評であることを指摘するにとどめよう。

批評がとりもなをさず價値判斷である限りわれわれはこの標準を結極藝術をして人生（全体としての社會生活を含む）によらしめるか、藝術をして藝術によらしめるかの分岐点に立つ。このことは先に生活のための藝術、藝術のための藝術に就て語つたが如く、其一方を以つて絶對とすべきではなく、全体としての社會生活の中に藝術を位置せしめて藝術は藝術として、その價値判斷の目標は藝術それ自身の中に、人生の科學、創造即ち批評を有つてゐるものとして理解すべきであろう。

以上二三に就いてみるが如く、批評の精神は創造本能とイコールなるものとしてわれわれの心理に發生し進展の翼をおしろひげたのである。

批評は人間自然の性情でさへある。

無理想なる詩人は己れの性情さへ隱蔽する。卑法なるものは詩の前に自刄するがいい、われわれは作品自身の中に、批評の正しき精神をひとつの價値の行爲として求めなければならない。

批評の精神こそ確たる詩精神とともに、われわれを進ませ詩をすゝませる原動力であろう。

アド・リビタム

——詩の問題を中心として——

鹽野保男

批評

一切の批評は、文明批評にその本籍地を置くことに依つて、始めて、批評として有意義となり得る。これ以外の批評は、結局、象の鼻を撫して、象を語るが如きものとなるであらう。

生産の文學

凡ゆる批評に共通する。本質的資格としての文明批評的立場から見れば、文學も一つの社會現象であるに相違なく、從つて、作家のものする作品は、必然的に何等かの社會的意義を生じ、亦更に、進んで社會的な意義を意識的に持たねばならないものとなる。即ち、作家の仕事は、常に何ものかを社會にプラスし、亦プラスすることを意識されねばならない。

今、假に、全体としての社會面に、積極と消極との二つの面を求むるとすれば、作家の仕事が、その何れの面にプラスするものであらねばならぬかは、言はずして明白である。消極面にプラスすると言ふことは、何ものかをプラスすることに於ては變りはないが、所詮、それは積極面との距離を擴大することに拍車をかけることになる。それは、逆行への協力であり、即ち、社會の正常なる發展を阻止するマイナス的行爲である。

社會の消極面とは何か。

社會の積極面とは何か。

文學の消極面とは何か。

文學の積極面とは何か。

これに對する見透このつかない者には、既に文學

を行爲する資格は與へられて居ない。而も尙、彼がこのタブーを冒すとするならば、彼は既に文化の敵であり、文學の屠殺者である。

忘れてならないことは、吾々の文學が社會の中に生れ、その中で衰亡し、その中で成育して來たことである。

消費の文化より生産の文化へ。
消費の文學より生産の文學へ。
指標は既に高く揭げられて居る。

思　想

無思想、それは勿論、ナンセンスがセンスを否定するセンスであつた如く、既にそれ自身、思想の皆無と言ふことではなしに、ひとつの思想的根據を表明して居るものである。

即ち、それは、貧困な思想、發展性の無い思想、或は發展性の微弱な思想、未熟な思想、斯う云つた一系列の劣等な思想を、それをそれなりに示すことを爲さず、体よく誤問化すに都合のよい假面であることが多い。一枚の寫眞、二、三行のニュースの中にも思想は在る。況んや、思想の無い文學などと言ふものは考へられない。

文學に於て思想が問題になるのは、その傾向や、本質や、分量や、消化の工合や、狀態等であつて、それが在るか無いかと云ふことではない。

然るに、文學の思想について、その有無が問題にされると云ふことは、この現象それ自体一つの思想的背景を有するものであり、更に、文學に無思想を要求する側の人間に到つては、そこに吾々は、彼等の所謂無思想を看取する迄のことではあるが、最後に一言、「白人と稱する有色人種」のことを知つで居るかと彼等に尋ねたい。

現　實

現實を見よ、これは換言すれば、日常生活を認識せよと云ふことである。

然し、現實を見よと言ふ言葉の中に、多くの人々が考へて居るものは、何か非日常的なもの、或は、超日常的なものゝ如くである。然し、現實とはとりもなほさず吾々が面と向つて居り、且その中に位置する處の日々の生活面でしかない。これ以外に如何なる現實の在らう筈もなく、亦この日常生活以外に現實を認識する如何なる對象もない筈である。

だが、現實を認識すると云ふことは、決して、家計簿の頁をめくつたり、新聞紙を隅から隅まで目を通したり、自分をやたらに掘り下げたりすることではない。百の現象を並べて見たところで、そこから本質を握り出せなかつたら、彼の爲して居ることは最も下手糞な寫眞技師にも及ばないのである。

泡　沫

患者に向つて、「あなたは脚氣だ、ビターミンBを攝りなさい」と言ふ醫者が、どうしたらビターミンBが攝れるか、どんな食物にそれが在るかを答へられなかつたとしたら、彼は醫者として最早問題にならない。

具体へと血の通じて居ない抽象、これも、それ自身如何に高尙且精確であらうとも、問題にならない。

と同樣に、現實から血を吸ひ上げて居ない一切の觀念、思想、そして斯うしたものに根據を置いて爲される一切の行爲、これもあの問題にならない醫者と同樣に、問題にならない代物である。

文壇や詩壇で、泡沫の如く明滅するイズムや流派、その作品と理論についても、右と同樣なことが言はれるであらう。

然し泡沫ですら、消えては水に還ることを知つて居るのだが、後等は一体何處に歸つたであらうか。

夢と現實

都會を離れて、時たまに接する山や海、その雄大なる或は洋々たる自然の風景の前に、都會人は暫し自己を忘れ、生活を忘れ、社會を忘れる。それは、

あの夢みて居る殺那の氣持に共通する。それも一つの現實には相違ないが、精神的、心理的には一つの夢である。

然し、常に山や海と面接し、その裡に生活して居る人々にとつては、是等のものは常に生きた現實生活の環内に於て眺められ、考へられて居て、都會人が時たまに眺めて感ずるものとは、かなりの相違がある。はつきり言へば、都會人は夢を、彼等は現實を、その同一の對象から同時に享けとるのである。

是と同様に、都會を訪れた僻地の人々の目には、都會人のヒリヒリする現實も夢としか映らないのである。

然し、都會人も僻地の人々も、決して彼等の眺め考へたものを夢とは思はないのである。それはやつぱり一つの現實として彼等の心に刻み込まれて了ふのである。而も、夢は依然として夢であり、現實は依然として現實であることに變りはない。

ところで、若し、詩や小説や劇や映畫やその他一切の藝術に於て語られる現實が、若し斯うしたものであつたとしたら、私の答へは斯うである。——何人も、現實を夢にする資格がない様に、夢を現實として語る資格もない筈だ。

知識と教養

今日、知識人の數は、書店に堆く積まれた新刊書よりも多い。然し、その中から、一冊の教養人を探し當てることは、全く砂漠に水を求むると同様である。

今日私が人に求むるものは、原則として、最早彼の知識ではなくして、彼の教養についてである。

單なる知識の堆積は、假令それが如何に巨大であらうとも、指令塔の無い戰艦の如きものであらう。

脂肪

總て藝術家は、彼の技術を存分に驅使すればよい。然し、技術の脂肪で身動きも出來なくなつた藝術は勿論、恰好のよいものではないが、何よりもその息

苦しさがたまらない。

交際

藝術家同志の交際は、社交的辭禮の終るところから始まらねばならない。と言ふのは、御互の間に虚僞があつてはならないからである。然し、實際には、世間並の挨拶か、さもなければ、所謂變人奇人ぶりを見せられるのが通り相場だ。だから私は、多く、その人よりもその作品と交はることにして居る。

文學を知る

文學を知らないが故に、小説や詩が書けるので、少しでも知り始めたら書けなくなる、そんな作家は居ないとは言へまい。言へまいどころではない、實は案外多いのだ。

何、その證據を擧げる？ 容易いことだ。若し、君が正直に自分を省みることを知つて居るならば、必ず君自身についても、その時何かの時代にそれを發見出來るだらう。發見出來れば君の藝術の爲めに僕は心から祝福する。

片手間仕事

新聞配達や牛乳配りをして大學を出られたのは、何時頃のことか。

今日の社會に片手間仕事があつたら、むしろ愛嬌だ。どんな下らぬ仕事でも、皆立派に獨立した職業的仕事となりつゝある今日だ。このことは、文學の世界にだつて同じく當はまる。

不過なる作家に

屑屋の塵箱に金目になる屑なんかある筈はないと思ふ——ところがあるのだ。

それを漁つて歩くもう一枚上手の屑屋があるのだから、はつきりして居る。これは冗談ではない。東京の屋根の下での日常事なのだ。

流行歌

腹が空つぽの時、人間は唄はない。

斯くて、流行歌は常に必づ人間の悲鳴であり、或は咆吼であつた。

商品價値の追放

その作品の中に、商品價値と藝術價値とを等分に兩立せしめなければならない藝術家の立場と言ふものは、明かにひとつの恐慌の裡に立つて居るものである。

而も、此の恐慌の波に揉まれ乍ら、藝術家がどの程度まで彼の藝術行爲を伸展せしめ得るか、又逆に、どの程度までそれを萎縮せしめればならないか——これが彼の藝術家としての、死活的岐路であることを考へる時、此の恐慌を切り拔けるには、如何なる手段が殘されて居るだらうか。

一切の商品價値を第一線から追放すること、手段は唯これだけである。

生活經驗と眞理

その各々の生活經驗に基いて、人間は少くとも或る世界觀なり、社會觀なり、人生觀なりを持つて居る筈である。然し、生活經驗と言つても、多くはその人々の職業なり、專門に根を置く生活經驗であつて、特殊的であり、局部的なものが大部分である。そして、此の狀態をそのまゝ肯定し切つて居るのも、多くの人々に見出される共通点である。然し、彼等は、その特殊にして局部的な見解を以て、恰も一切の社會なり、世界なりが割り切れるものゝ如く、實際は、考へ且行つて居る。

此の幼稚な職業的、專門的偏見——然し、此の偏見ですら、それに力が與へられ、或は力を獲て來る時、吾々は最早笑つては濟まされない。偏見が指導權を握り、勝利を獲る時代は、常に眞理が蹂躙され、榮光が沒する時代であつたからだ。

切り花

それが生じた時代や社會とは無關係に、ただそれのみを固定化した言葉——多くの箴言、俚諺、格言、金言等、斯うしたものの中には、現實の生活に對しては、全く空粗且無力なものが多い。それは切り花の如く、生きて居るように見へても、亦質に於て、時代や社會の根が切り取られた時、既に早くも死んで居たのである。

盲ひたる知性

或る特定の民族なり國民、或る特定の土地なり國家なりにしか通用しない樣な思想とか、政治とか、藝術とか、道德とかに、眞理の含まれて居たためしがない。

それは、常に波立つた感情であり、振りあげられた拳であり、盲ひたる知性であつた。

シユルレアリスムの周圍に

――附　漠然たる詩壇時評――

丹羽哲夫

我國に於いては（詩と詩論）の終刊當時、既にシユルレアリスムの沒落が叫ばれてゐた。これはフランスに於けるシユルレアリストのグループが、その機關誌を失ひ、ために彼等の運動全般を見透すことが困難となり、彼等の運動が支離滅裂になつたと誤認したことにも、その一因は存する。しかしながらその大半は、我國文學者の移り氣な、新らしがり屋的な性癖に歸せねばならないであらう。

現に畫壇の方面に於いては、シユルレアリスムの運動が我國畫壇に波及したのは、詩壇に於けるよりも遲く、僅々數年を出でぬ狀態であるが、年と共にその運動は旺盛となり、本年に入るや山中散生、瀧口修造兩氏を我國委員とする（海外超現實主義繪畫展）が、東京、大阪、京都、名古屋の四箇所に開催され、相當の好成績を收めこの運動に一層の拍車をかけてゐる狀態である。

顧みて詩壇を觀望するに、其處にはシユルレアリストを自稱せざるシユルレアリストの、如何に多く氾濫しつゝあることか。彼等所謂新詩人は、既に沒落したと誤認せられるシユルレアリスムに、既に沒落せるものなるの故を以て、その入籍を拒否してゐるに過ぎない。しかも彼等自身は、その理論に於てシユルレアリスムより一歩前進してゐることを自負してゐるかに見えるが、それは彼等の貧血した頭腦によつて描かれた、一つの蜃氣樓にしかぎないのである。彼等の貧弱なエクスペリメントを見よ。それは正に村野四郎氏の喝破せる如く、[註一]「子供ぢみた目標をもたない空鐵砲みたいなサタイヤをもつて、滑稽な尖鋭振りをすること」に外ならない。

亦彼等の或者は英國詩人の影響を受けて、「詩人は大きな意味での政治家でさへなければならない」と云ふ。そしてこの言葉は正しい。しかし傳統的に詩人に社會的位置を與へ、詩人の社會的位置を重要視する英國と、詩人の社會的位置なんか殆んど顧慮の價値も無しとして來た我國とでは――そしてこの社會情勢の相違が彼等の運動を有意義なものにするのではあるが――、その理論を實踐する具体的方法も必然的に相違するものである。然るにこの点に深く留意しない彼等の、彼等の詩を直ちに英國詩人のそれの位置に置かんとする努力、エクスペリメントは、何等確實な基礎のない表面的誇示に止るのみである。

要するに彼等は、そのシユルレアリストを自稱せざるが如く、似非シユルレアリストに墮落し、シユルレアリスムの精神を失ひ、たゞその形骸のみを固持し、且その處置に困却し、海外よりの波の動くがまゝに浮游してゐる有様である。

近時、我國詩壇に抒情詩を云々する聲の高まりつゝあるを聞く。これはロマンチシズムの勃興に從つて起つて來たものと考へられる。ロマンチシズムは、見方によつては一つの現實逃避的行動であると見做し得る。即ち、想像によつて現實を遊離し、現實以外のなにものかに憧れる……意味に於て。殊に抒情詩に於いてはこの傾向は一層顯著となり、時代を超越しさへする。これに就いてセシル・D・ルイスは云ふ。

[註二]「抒情詩の背後に僕等はいつでも或る種の放埒を感ずる。抒情詩は、詩人が抒情詩そのものの法則と自分の感覺上の經驗との外には、何の責任ももたなくともいゝ形式である。自分の直接の問題以外に、廣大な經驗世界に面してをらなければならぬ社會狀態では、又さういふ世界が何等かの態度を示すことを自分に需めてゐるのを感ぜずにはをれぬやうな時代には、抒情詩の無責任といふことは困難になるのである。」

要するに抒情詩の最大欠陥は、その時代から遊離してゐること、從つて時代相、時代精神を明確に反映し得ない点にある。抒情詩に於い如何に新しい手法を用ひ、如何に斬新な感覺を取扱はうと、それは單に新しさを示すのみであつて、それによつて新しき時代を示すことは出來ない。時代相を反映しない、否反映し得ない文學に、われわれはその時代の最高文學たるの資格を認めることは出來ない。若しルイスの云ふが如く、「内的な聲以外の一切のものに關する責任を持たぬ氣持こそ、つむじの曲つた時代の影響から自己を純粹に保つ唯一の方法」[註三]であるならば、われわれは「純粹」には一顧の價値だに與へ得ないものである。

今シュルレアリスムを假定的に——或は幾分變態的であるかも知れないが——、その手法と思想との兩方面から觀察してみたいと思ふ。

シュルレアリスムの手法を簡單に分析して見るに、聯想の嵐、フロイドの夢の分析より出發せる性慾的觀察による手法、オートマテイスム、等がその主なるものであらう。此等が極めて複雜に綜合されて、所謂超現實的手法を形成するものである。これらの一つ一つに就いて少しく考察してみたい。

「聯想の嵐」は云ふ迄もなく、習慣のために冬眠狀態に陷つた意識力を、習慣を破ることによつて覺醒せしめ詩的な美を創造せんとするものである。しかし此處にも一つの陷穽がある。それに就いて岩本修藏氏の言葉を引用すれば——

「[註四]穽が單に觀念の遊戯に終るものでない限りは、言語によつて詩が生産されるといふことは考へられない。まして、文學の位置や組み合せ——觀念との豫期せざる狀態に於ける「衝突」が何等かの藝術的な雰圍氣をもち來らすであらうといふ漠然たる逃避的手段——等を如何に複雜に自らも豫想外の混亂の中に封じ込めて偶然を待たうとも、われわれの觀念聯合の能力が社會的又は時代的理由に於いて有限的のものである以上はそこに新しい詩的世界が生ずる筈はないのである。」（傍点筆者）

そしてこの言葉は正當である。北園克衛氏の詩を北園克衛氏の詩として認めてゐる一グループの詩人達に、この言葉に對する答辯を聞きたいものとも思ふ。「聯想の嵐」をのみ追求するのは逃避的行動であり、觀念の遊戯に過ぎないことは明らかである。それと同時にしかしながら、シュルレアリスムが「聯想の嵐」をのみ追求するものではないといふことも明らかにされねばならぬ。「聯想の嵐」はシュルレアリスムによつて發見、確立された。しかしながらシュルレアリスムは「聯想の嵐」をその一手法として利用してゐるに過ぎないのである。

「[註五]聯想作用の批判に就いては梶浦正之氏も指摘してゐる。

シュルレアリストがフロイドの精神分析に發見した性慾的觀察方法は、奇しくもシュルレアリスムを人間化し肉体化した。

内部世界と外部世界との結合に進む一方向をシュルレアリスムに與へた。「詩と唯物論」に於いて木下常太郎氏は云ふ——

「[註六]超自然が産んだ人間でなくて自然が産んだ人間といふ新しい認識は、これを通じて詩を自然化し、人間化し肉体化し始める。人間を肉体的に觀察するものが、人間の諸機能によつて産み出される詩だけを超自然現象の如くに取扱ふのは馬鹿げた話である。諸科學は詩を自然化し人間化し肉体化する道をつけてくれる。」

この言葉は一見シュルレアリスムを攻撃してゐるかに見えるが、人間化し肉体化することが性慾的觀察に立脚してをり、その性慾的觀察がフロイドの精神分析から出發してゐることを、前後の關係から知るならば、それはシュルレアリスム自身への攻撃ではなくて寧ろ、詩をインスピレーションによつて書くなどと稱する夜明け前の

詩人達、シュルレアリスムを超自然的のものとして取扱ひ、これに攻撃を加へる詩人達、亦シュルレアリスムを超自然の柵内に押込めるべく狂奔してゐる似非シュルレアリスト達、に對する攻撃であることを知るであらう。

「シュルレアリスムは純粹に心靈的なオートマテイスム（自働法）である。」[註七] とアンドレ・ブルトンは云ふ。嚴密な意味でのオートマテイスム、それは極めて異常なる特異体質の所有者、少くとも極めてアブノルマルな心理狀態、更に好意的に云ふならば、天才、によつて始めて可能なる行爲である。しかしながら「それは理性に訓練された全き統制を無くし、意識的な審美的又は道德的偏見から離れて、思想を書取ることである。」[註八] ならば更に進めて、停滯することなき無意識的な意識の一貫せる流れ、と解釋するならば、われわれにも容易に理解され、且實行され得る行爲に外ならないのである。

さてこれらが複雜に綜合されて形成する所謂超現實的手法に就いて考へてみる——。筆者は超現實手法——超現實主義ではない——の日本化といふことを考へる。

これは一見その思想の國際化を目標とするシュルレアリスムの主旨に相反するが如く思はれるが、然らざることは次に述べるところによつて明らかにされるであらう。

我國のシュルレアリスムはフランスのそれの飜譯以外の何ものでもなかつた。外國文化を無批判に攝取する我民族の最大欠点は、シュルレアリスムの移入に於いても遺憾なく發揮された。全くそれは純然たる飜譯であつた。そしてこのことが我國の先輩詩人の或者をしてシュルレアリスム運動を輕蔑せしめ、フランス文學に造詣の深い有爲なる詩人——例へば梶浦正之氏等——を、その運動の當初に於いて既に失はしめた。

かくの如き無批判なる出發、更にその上に累績された無批判なる變化——フランスのシュルレアリストの變化を無批判に攝取せるもの——、かく如きものが崩壞に導びかれるのは、或は必然とも云ひ得る。かゝるが故にわ

れわれは今日、再びその出發点に戻つてシュルレアリスムを批判する必要をも感ずるのである。

超現實的手法の日本化。しかしながらそれは決して日本的な超現實的手法の創造、の方向に進むべきではない。何故ならばそれは明らかに、その思想の國際化を目標とするシュルレアリスムの主旨に相反するからである。

筆者はこゝで西脇順三郎氏の業績の一つを想起する。氏は云ふ迄もなく我國に於けるシュルレアリスム理論の最初の紹介者であり、良き指導者であつたが、その紹介乃至說明の一方法として古典文學、例へばシェクスピア等に超自然的ポエジイのあることを示してゐる。この如き試みを我國文學に應用する、即ち我國古典文學に超現實的手法を發見する、このことは相當の意義を持つものであると思ふ。それは現在シュルレアリスムを不消化のまゝ排泄せんとしてゐるかに見える我國詩壇に、一つの示唆を與へるものであるのみならず、一般大衆をしてシュルレアリスムを理解せしむる上に大いなる貢獻をなすものである。そして文學が或程度迄は、或は本質的に讀者を豫想するものである以上、重大な意義を有するものであると思ふ。

我國の先輩詩人の或者は、サンボリスム攝取の際に於いて、蕪村の俳句等を引用して、その手法の古くから我國にあることを示した。かくの如き努力がシュルレアリスムに於いても絕對的に必要なのではなからうか。

イギリスにシュルレアリスムのグループが結成されたのは極めて近々のことに屬する。しかし彼等はシュルレアリスムをイギリスのそれとして攝取したのである。例へばハーバート・リードはその著「シュルリアリズム」の中で、たとへ西脇順三郎氏が先鞭をつけたものとはいへ、イギリスの古典文學に超現實的手法の存在してゐることを示してゐる。かくの如き英國民の健實性、それは一面尊敬の價値あるものと思ふ。

多くの人々はシュルレアリスムには思想がないと云ふ。しかしながらこれも亦一つの誤認であると云はねばな

らない。後に述べるであらう如き理由によつて、シュルレアリスムに思想の稀薄であつたことは事實であるが、これを以て直ちに無思想と斷ずることは出來ない。現に、今迄のシュルレアリスムに余りにも思想が稀薄であり、觀念の遊戯に墮するが如き傾向あるに抗して、ポール・エリュアール、山中散産氏等は、その最近作に於いて思想を强調してゐるのである。

フランスのシュルレアリスト達は、その或者は政治的に進出せんとし、亦他の或者はコンミュニズムと結合せんとし、此等の人々と純文學としてのシュルレアリスムを固守する人々との間に、反目、論爭が繰返されてゐる。かゝる狀態を見做して、我國のシュルレアリスムの或者は、シュルレアリスムの沒落と爲した。しかしこれは大きな誤りであらう。シュルレアリスムそれ自身は政治的に進出すべきものでなく、亦コンミュニズムと結合すべきものでもなく、その何れにも偏しないものである。何故ならば、シュルレアリスムがプロパガンダしないことを以てその信案とする以上、その政治的に進出すべきでないことは明らかである。シュルレアリスムは勿論ブルジョアに對しては極度の反感をするものであり、フロイドの精神分析からコンミュニズムに興味を感じてはゐるが、全的に承認してゐるのではない。即ち、コンミュニズムはわれわれに一個の物体としての自由は與へ得るが、果して人間としての自由を與へ得るや否やに就いて疑問を持つものである。

勿論コンミュニズムを合法的存在として認めてゐるフランスと、非合法的な位置しか與へられない我國とでは、著しい差異を生じて來るわけである。しかしこゝに奇しくも、シュルレアリスムの思想と、我國のインテリゲンチヤの信奉するリベラリズムの思想とが、極めて酷似してゐることが發見される。——以下シュルレアリスムをフランスから切離して、我國に於いてのみ考へてみる——即ち、ブルジョアに對しては極度の反感を抱くけれども——それは直ちに資本主義に對して反感を抱くことであるが——、コンミュニズムに對しては、資本主義の制

壓に代るコンミュニズムの制壓を恐れる。——この思想は兩者共全く一致する。極言すれば、シュルレアリスムの思想はインテリゲンチヤの常識であるとすら云ひ得るであらう。果して然らば、インテリゲンチヤはシュルレアリスムに同感を持ち、その運動に對して興味を感ずべき筈である。然るに現實に於いてはどうであらうか。如何に慾目に見てもシュルレアリスムがインテリゲンチヤの支持を得てゐるとは思はれない。しかしながらこれは現代詩が大衆を遊離してゐるからに外ならない。亦シュルレアリズムの思想がインテリゲンチヤに認識されてゐないからであり、その責の一半はシュルレアリストが負はねばならない。即ち、我國のシュルレアリストは、フランスに於けると同樣、この思想の發表に余り意を用ひなかつた。それよりも超現實的手法による新しき詩的世界の開拓の方が、より興味ある仕事であつたからでもあらう。亦一半は、かゝる思想の發表が、我國現在の社會經濟組織より强壓を受けることを恐れたからでもあらう。彼等は「空鐵砲みたいなサタイヤ」によつて、僅に自己滿足してゐるに過ぎなかつた。

シュルレアリスムに於いて、その思想の發表により多くの努力を拂ふとき、それは果してインテリゲンチヤの支持を得るであらうか。若し得なかつたとしたならば、それはシュールレリスムのあの奇驕とも見える手法が障壁をなしてゐるからに外ならない。然らばその障壁はそれを築いた方に責があるのか、或は乘越し得ない方に罪があるのか。シュルレアリスムの手法は、シュルレアリスムとして必然的であるのみならず、我國現在の社會經濟組織が許す最大のものであることを思ふ。即ち、シュルレアリスムの手法は殆んど絶對的のものである。然りとすれば、われわれは讀者をして手法の障壁を乘越さしむる必要を絶對的に痛感する。

詩は既に長年月間殆んど讀者を豫想することなしに文學せられて來た。かくの如き不自然なる行爲がその滅亡を叫ばれるのは、一面必然的である。かゝるが故にわれわれは今日、先づ知識階級層に確固たる地盤を得て、力

強き創造期へと爆進する必要を痛感するのである。

人類と人類との爭鬪によつて人類文化の發展を計る……、かくの如き不自然な、慘酷な發展過程上に、人類は既に何千年間、否例萬年あることであらう。われわれは最早かくの如き文化發展の過程上に安住することは許されない。不自然な、人類の福祉に相反するが如き現在の社會經濟組織に對する不滿を發表する。それは必然的に新しき社會經濟組織に對する待望であり、その創造である。

かくの如きものを文學に於いて求めるとき、それはシュルレアリスム以外の例ものもないてあらう。曾つてはプロレタリア文學が全面的鬪爭を敢行した。しかしそれは結局個々擊破にしか過ぎず、東奔西走戰ひ疲れ、且亦それ自身に内藏する文學性の貧弱乃至欠除のために崩壞し去つた。更に純粹小說作家の現狀を見よ。所謂中堅作家群には極めて特殊なる題材の外には、ニヒリスチツクな私小說以外の何ものもない。彼等はニヒリズムによつて僅かに自己の身心を滿足させてゐる。そして詩人の或者は彼等に感應して、同じ樣にニヒリスチツクな詩を書いてゐる。これらニヒリズムを突破して力强き健設期へと進むのがシュールレアリスムであり、そしてその手法を完全に活用し得るものは、文學に於いては、詩を措いて外にないことを思ふ。即ち、詩によつてのみ現在の社會經濟組織に對する不滿を高唱し得るのである。文學の他の如何なるジヤンルによつても表現し得ざるものを、詩は表現し得る。しかも鬱勃たる時代精神を反映して……。このことはわれわれに大いなる自負を與へる。詩に絕對的と迄云ひ得る地位が與へられるのである。

〔附言〕 期日切迫のため充分檢討の余暇與へられず、筆者自身意に滿たざるところも多い。ひとへに大方の寬恕に俟つ。詩を極めて嚴肅な意味で考へる。詩は、文學の他のジヤンルに於いては表現し得ないものを、表現しなければならないと思ふ。詩に絕對的の位置を與へるために……。筆者の性癖です。

註一 「文藝汎論」四月號「詩壇時評」村野四郎

註二、三 「新領土」七月號「リリシズムの問題」セシル・D・ルイス 外山定男譯

註四 「詩とコント」創刊號「文化傳統の運搬者としての言語とそれを表現媒介とする詩に於いてとるべき言語の正統的位置に就いて」岩本修藏

註五 「詩文學研究」第一輯「知性の荒鷲」梶浦正之

註六 「文藝汎論」七月號「詩と唯物論」木下常太郎

註七、八 「超現實主義の交流」「シュルレアリスムの位置」アンドレ・ブルトン 山中散生譯

驟雨通過

木下夕爾

街はみるまに昏くなつて來た。そしてしばらく羊齒の葉のやうにざわめいた。本屋の戸口や百貨店の食糧品賣場で私たちは考へたかもしれない。南がはの窓の鎧戸のこと、もうとりかへてもいいカアテンのことなどを。――明るさがまた地球にもどつてきた。あたりはエエテルのやうにすずしく、陽が輝いて私たちを安心させる。そんなとき、死の顔もまた美しいもののやうに思ふことがある。私たちは青空を見た。虹を見た。一臺の旅客機が孤をゑがいてとぶのを見た。それから私たちは故郷で飼つてゐたカアニオラン種の蜜蜂の群をおもつた。彼らは？彼らはいつたいどこへ逃げたらう？

LE TEMPS INCONNUE

僕は陽のあたる電車に乘つてゐる　何年もこの席にすは

つてゐるやうなやうすで
人人はインクの匂ひのする新聞を讀んでゐる
花はいつのまに咲いたらう？
さうしていつのまに散つたらう？
僕はもうわすれてしまつた
人人は知らないふりをしてゐる
電車のスピイト　ふと僕は死といふことを考へる
それがたやすい奇術であるなら
ハンカチイフのやうな子供たちよ眠れ
地球をとめるやうに僕は電車をとめてやらう
僕の紅い心臓はメタルの壁にぶつかるだらう。
そこから數個のボンボンがとびだすだらう
笑ひのやうにそれがこわれるときに

蜩の家

最上八平

I

陽はもう小鳥達を追ひ越して櫟林に沒ち　ひとときの林

を明るくし　亦しても故園に青い黄昏を甦らせるのだつ
た私はひとりで蚊遣火を焚き　ランプに火をいれ　机
に向つて書物をひらく
夕暮の書物の繪よ
叢の虫たちのやうにやさしく歌つてゐる數數の字よ
君等はをとゝひ繪で見た外國の街のやうに美しく　遠
い友の囁きのやうになつかしい
ふと庭を見る
庭の一丈菊の向の葡萄柵に蜩がとまる　あの紫藍の果
房にはまだ遠い青い實に

Ⅱ

昨日町で買つた行軍將棋の駒一つ　今日は片輪の兵士
のやうに緣側の戰場に取り殘されてたほれてゐる（子供
等はもう四散して誰もゐない）
私は家來のゐない中將と遊んでゐる
私は子供でない　だが今私は子供なのだ

Ⅲ

廚で母に手傳ふ妹のエプロンも白く　蟬の幼虫を探し
てゐた子供等はオランダ菊の中を歸つて來る
蜩は鳴く　拍子木のやうにかん高く
夜と晝との間を彷徨ひ悲しむかのやうに
やがて　蜩の鳴音も止み　遠い町には酸漿(ほほづき)提燈のやう
な灯がついて　村は靜かに黑い翼につつまれて行く

蛇性圖

細川昊

カンバスに映る初夏の盛裝は
つづれ織りに描いた古代畫の風景
さんさんと陽光は綠を散らし
生の觀喜にしじまのひとゝき
微風は長蛇をのせて

潤葉樹林をそよそよとわたる
靜寂を呼吸する樹下の憩ひに
いつしかイヴの腦漿を毒し
智惠の實に花さかせた古代の妖精
いづこえか觸角の火焔に
烱烱とするどい直線の視点

おびゆるは慘たる喜劇
すでに魔術は蛇性の靈に
執拗な放射線のスパーク
睥睨はサタンの快感に鎌首となり
ぢりぢりと迫りくるサディズム

カンバスは亂れて電擊の放針
肉体を遊離する黄色の蝶に
地圖は潤葉樹林に滴滴の血痕
透明な世紀の嵐に

脫皮もまた初夏の足跡を刻む

あゝ　われいま破れたるカンバスに
暗黑の瞳をひらき
潤葉樹林のパノラマに居れど
悔いなき生の觀喜の祝曲の酒に
醉ひしれたる蛇性の放射に
オナニズムは殘骸となりて
悲し　陽光さんさんと綠をそゝげど——

黄昏の表情

渡邊　曠彦

菫色のカーテンを引えて、靜かに深海の豫報に耳傾ける、
こゝは巷から見逃がされた茶房の一隅、いつか敗旗を揭げた風は、大きな空圏を劃して、あゝ、流動する陰影もない休息の座に一匹の黑蝶となつて翻ひたい希望であつたが。

色褪せた遺賢のしはぶき、一杯のコクテルを揚げて、廻りゆく地殼の惰熱を愛そう。消え惱む精氣の傍に、羽を休める夏虫の輕卒を嘲ふものありや、君よ、石棺の底にミイラする人々の群、少女はやがて白い花に紅唇を捧げるだろう。

圓盤の唄ふ赤道の憂鬱、ストローを傳ふは恥らひ多き日の思念ぞ、心の支柱を失した者の吐く、冷たくも轉落する濁水のほとり、紫煙は乳房の香りを浮べ、ドレスの裳裾にからむ色彩の戯れ、かゝる華かな祭典に連つて、なほも寒々と笛を吹くのです。

涸れ果てた泉ではないか、遠き日の夢を燻べ、ふるきmemoを繰る指先に漂へよる一瞬、友よ、椅子をよせて、忍びよる季節の胞子へ、頰あかきころの息吹きを投げ與えよう、いまは仄白き燐光となつて燃え盡きようとも……

みよ　最後の饗宴をとざした彼方、炎々と燒きはらう誇

りもない。氷河を追ふには哀れな星よ、もはや夜眠にも白き花を摘まねばならぬのであろう。女は臘燭に灯を點じて、再びルージュを塗抹しようとする、だが僕は、退えて石床の邊りに坐を占め、微かにゆらぐ花等のさゝやきを聞かねばならぬ。

友よ！　次なる開幕のベルを聞くために、靜かに用意を整へねばならぬのだ。

或る出船

西山五百枝

そよ風けむり
ま冬の海もやをらけく
入陽
ゆたけきいろどりに海をつゝみて
エンジンのひゞきギルギル船室にこもる

また　愛くるしき笑顔に　船室はつゝまれたり
出船は春のしらべぞこもる

うすぎぬ
もの云はぬ
眩しさをさけて
あゝ　ふるさとのうたに似たり。

（朗讀調錐体漸層詩）

自然像

堀口太平

私には舞踏病の氣味があるのか？

×

床屋の親爺と政治論をする事は出來る。
醫者とスポーツの話をするのも出來る。
友人の旅行の話を聞くのも好きだ。

×

古本屋で本を見るのは厭だ。
町中で手帖を付けるのも厭だ。
詩論は猥談に過ぎない。
可憐な微笑にも意味なく復讐する。
同胞さへ私には自家中毒と化つた。

×

私の欲望は囃し立てるが……
唇が鼻腔を塞がふが……
どうでも……
足並揃へるのは照れ臭い！

×

私には舞踏病の氣味があるのか？

短詩

天文學者が
星の間に

やたらに線を引いたので、
空を見る度に、
目障りに堪へぬ事だ！

×

この願は最も本質的な願であつた。
吹き下す風は雪催ひで、
吾に次の事を教へた
「快活は比重を失つた深海動物、輝く痴呆」

×

鼻が青空につかへた
希望は達せられ、歡喜は鎮まり行く。
吾は全的に融合した。
青い瓦斯燈と暖い日光とで吾を見る。

×

昨日とは……
過ぎ去つた時か？
來るべきか？
それでも……

撒き散らした腋臭なのか？

×

吾は吾が口腔の中を歩き廻つた。
無限大にして無際限の中に密封された。
赤い唇を見た時、吾は氣が狂つた。

×

身内に燃え上る熱の爲
馬鹿な俺は腦味噌を火傷して了つた。

東洋

菅原信之介

ちべつとの　おくに
とうやうの　ひみつが　ある。
とうやうの　ひみつが　ある。
むすめは　でんまるくから　遠い　たましいを　さがし
に　しなのくにに來る。　でも　たよりない　えにし

であつた。

ぐらんどほてるの　すみに　といきする　ぶろんどの髪
の　かすかな霧雨に　ぬれるのは　涙が、過去を　見
せるから。

ここは　小雨けぶる　國際港です。

はるばると　はるばると　ふらんすの大學を出て來た
しづかな娘　まどから見上げた空に　くらい　雲彩の
憂が　ありまする

たましゐを　さがしに　とうやうの　おくふかく
小雨の中に　消えて行くのを　風は見た。
あるひは　この娘が、その時雨の日の孤兒であつたか
も知れないのです。麗人の　殘した　かつぷに　せめ
てもの　口づけをして　あげてください。ふかい運命
が、そこには　ありませう。

それから　どうなつたか
北風の唄を　きいて下さい。

淵

羽田　貞

猛つてゐた情熱を打ち殺す力なく
私は自分に餘つた。
苦痛と對陣してゐたが
もういけない—
あしきものこそよく。
あしきことよろしく。
ては神もはばかりて思ふ。
かりそめの行祭事
人目を盗みて
神のみの催し給ふ慰樂を
自分にゆるされてしまふとは——
情熱は、自分とともに床して

冷たき焔で燒かれてゐた。
火葬場は――
黑い花が開ひてゐた。

夏草

はぬあげる赤土、からだを包む若葉草、露多ければ潤ひ
又ぞ多く―琺瑯の膚皮―强き綠。清き王晶かざり。心―幸
に富み、あはれみ滿ちまじしめる慈、煩惱の口吻は―こ
こ頽廢の土のざはめき。

よきひとの聲ぞ　さもしく
よきひとの心ぞ　なげかはしく
よきひとの姿ぞ　いたほしく

細やかなる白花―生物の理想など、わが行く足を斷ちて
あゝ、われ靜かなる心に潤ふ。

秋近く

奈良　進

茉莉子よ
ねむれない花のかほりは
あなたの故里の悲歌を
私の胸でかき鳴らすのだ
あのせせらぎの畔りには
明日も又しろく雲が群れるだらうか
しかし
私が再び訪れるのはいつの日であらう

茉莉子よ
何も訊かないでください
圓らかなあなたのひとみが
私にはおそろしい
ひつそりした私の窓に

あなたに贈られた小鳥はねない
私の秘密を啄ばんで
昨夜姿を消したのだ
木の葉の音もなく散る
杜の小みちをしらないあれは
どこかで迷つてゐるであらう

茉莉子よ
可哀さうでも
決してあれを探さないように
何もかもそつとして置くのだ
幾年かたつて
あのせせらぎのあかるいとき
あなたはそれを想ひおこすであらう
でもあれをかなしまずに
私の訪れる日を待つてをれるだらうか
そして
私の秘密を訊いてはいけない

じつと昔の私を想ふのだ

貧しき歴程を撲つ豪雨

桑原貞子

碧い空に聲もなく
亂れる雲
立ち騒ぐ雲
山陰に　月の光りひろがり狹まり
こころの端を　痛々しく　吹きつのる風

窓に白い花
白い花が咲く　雷鳴など

愛情は遠い距離の果てに消え行くであらうか

雲と風と　風と雲と

この月　月などわが骨にやせ　風の中に
それは深海の魚類のやうに貧しい歴程にも眼を向けるい
とほしさである
はげしく　けわしく
――どしやぶつて來る雨にもわたしは耐え得られるであ
らうか

山想

星
ひとつ
峰もけわしく　黒ずんだ大空
遠く光る谷川に夕暮はすがれた心を押し流す山襞からは
銀河が湧きのぼるやうにみえ
凍りついた思念は冷い瓶をしつかりと握りしめてゐた
別れとなつた十年前の愛情の反芻

それが今も眞實なら
山の霧にむせてわたしはくやむまい
死をもおもひ遠く來てしまつた峠の薄ら明りに咲く白百合
ぬれた花びらに
ぬれた花びらに　ただひとつのもの
眞實　わたしはくやむまい

暦を剝ぐ海島

―外一篇―

島田　磬也

夕ざれば海韻の碧潭しとゞ
北海の笛は鳴りも止まず
孤獨の天日への郷愁蒼茫たり
死生を超えし愛の點描

さこそ哀愁の泡沫を添へて
あゝ眞須一の濱の波は羽搏く
婦は波濤の紋章、我は默示の奇巖
涙痕はまさしく奇巖なり
傷痕はかくも切なきものなるか
背後は松籟蕭々たる北海の山肌の
寂然たる原始美の頂天
永遠の時を劃して我等神人の衣を纏へり
實に神人の息吹の流雲をこそ
永遠の臥床の極地に覓るならん
啞々、天心に泳ぐ孤獨の魚よ、
我がこころの投網にかゝれかし

野生の花

僕が野生の花の蔭に匿れると
岩清水の音がさんさんと聽えてくる

神經の針を尖らしても
しんと滲み透る寂光が女のやうに
白日に倦んだこゝろの昃りに
―悲しく倚り添ふ
僕が花に化すと言ふ奇蹟を
誰が信じやう、恐らく……
その時うすら冷たい風が
僕のこゝろを花のやうに散らして
孤獨の虚ろな途をしやうしやうと拵へて
―歩いて行つた

―（九月下浣　杉並山房にて）―

山と雲

昨日　雨に洗われた山肌に

樺澤友佳

聖純な朝がひらける

山と雲との　情熱をつなぐ
白馬の群を越えて　わびしい花を咲かせる　おもかげよ

私は　山と雲と　彼女と生きようと決心した
私は　彼女に逢ふまいと誓つた
逢えばまたひとつの溝(ギャップ)が生れようから

風がゆれ　樹々がゆれ　雲がゆれ
乳房がゆれて　私の青春がゆれる

風に吹かれて　しみじみと　にほふてくる
水兵服から　ペタルから　青いメロンの　忘られぬ香ひ

私は芒野の明るさに雲とゐる

星が灯り　風はおち　痛々しい夕焼雲が山にかゝつて來た

世紀の　因襲の　重みのもとに
捨てゝゆかふには
あゝ　何とせつない　この感情の整理よ

秋雲が萱野をよぎる
私の生活に慾しいたゞひとつの山と雲

いとほしさも　かなしみも
みんな昨日の
今日はひとり　靜寂の中に山とゐる

憤激の水邊

丹羽哲夫

音もなく窓の中には西風が吹き
過去の希望はいくつかのあやまちを誘つたまゝ
苦痛を通つて水底に沈むところ
沈默の水面はけたゝましい泡ぶくとなり

風等の肩に白衣をひるがへす
それは遠く動脈の叢林をゆすぶり
午後の牧場に噴水の惰眠を貪るとき
憤激は僅に葉脈に齒型を殘し
沈默の再び水に沿ふて還るところ
水藻の色褪せた微笑を見る

× × ×

去れ　サマヨへる微笑よ
大いなる電擊の下に
一瞬すべては四散し
僅に羊齒類の繁茂するを見る

若き區劃の中で

池田日呂志

I

まぶしき　ねざめ、埒外の琴は怖れる。　エホバは懷しく
も胸をうたれて。

II

躊躇へば、お前は美はしく　やさしき風よ、言葉の外に。
あゝ聲は近く光にうねり。

III

哀しみよ、それも　ちらりと、非常にあかい唇にも遙れ
ると。あゝ愛しくも今日のミュトスは高い自我の腕に。

IV

追憶は、怖れもなく　アポロンの聖餐にも區劃の中にて
睡れ。なにも私は神にあたへぬ。美はしくお前は深く知
性の窓枠に展く。

V

ガラスの中に汗ばむ偶然の聲よ、アマリ、スの歌は匂ひ
に強く、白き姿はサルダンの流れにも燃える、新しくと
光り乍ら。

蝕月記

濛は昇りて地に乖き、乾極まりて途に在り。吾が閉ざせる白銀の哀しみ恰も波うつ奇しき百合花の怒りよ。疲れは暗く祈りの笛にも水絶えて　匂へる惡熱の怖れ聲低く樓廟の冊は金紙に暗く重たき影をと深き恨みを殘す、あゝ斯しも慘めに渴ける虛しきロゴスの示し　眼にも彩なる非情の苑に。

鳩と永遠

浦瀨白雨

開いたものを閉ざそう
花も、銀笛も
涙がおちぬ間に、瞼も
そして、瞑目してもつとはつきり見やう

巷の噪音を鎖せる
大理石の沈默の中で
鳩達は神々に就て語つてゐる
その白い頰に
眞赤な信仰を燃やして

鳩は洞窟の中にライオンと共に居る豫言者ダニエルの
又、焚殺臺に立てるジャンダアクの信仰を知つてゐる
青銅の意匠の中で
象が自らの青い意識に耳欹ててゐる
逃げて行く身振りの中に
輝く永遠

波斯のをどり子が、トルソの中に
散つて行く落葉の道を捉へやうとする
スピノザはレンズの中に
虛よりも空しい實在を研く
この神に醉へる神秘論者は

作品

安田吾朗

107

少年は無花果を食べるといつでも木馬に乘つたり南畵風な砂漠をよみがへらせたりすることが出來る。僕は病氣の少年に青い果物の籠の約束をはたすために店員に命づると店員は若い女の啞ひだつた。

131

泳ぐ月明りの空の黑い魚たちの群の流れからかそかなさゝやきが僕には明瞭りと理解る。シヤボン玉の中に身を置いて空に上る準備の途中僕は便所に行きたくなつて露臺からの鐵梯子を降つた。

158

廊下は長い程よいのだと開院式の日程の中でおんなはズ

ロースをはづしてみどりの桑園に捨てた窓はあけたまゝ。

159

霧の中に時計屋の窓がこはれてRRR號第二船舶は水夫一人港にのこして拔錨する汽笛である。

石器の街

津瀨準

芳醇な酒のあふれる流れに沿ふて、
もの言はぬ石器の街がある。
地圖にもない、
ひつそりした街が。

燃えさした木片ののこる街の眞晝
光も、影もない
耳を藉せ、
燧石を擊つ音が聞えるかも知れぬ。

戰（いくさ）

山巓に烽火のあがつた夜
湖畔では兵士達が骨牌をにらんでゐた。

木梢に霧の流れる晨
硝烟に燒かれた薔薇は萎れ、
地を匐ふ流彈に射拔かれた水瓶は乾いてゐた。

やがて
新しい靴音が聞えて來るだらう。

茶筵

雄渾な墨色で古木に烏を捕えた文晁
その前に沍かへる水仙の一眼…

梶浦正之

錆た爐釜が凩に應へるので
柄杓の長い把は徐に曲線を描き始めた…

青疊の漣に掌をつき　無言の頭を傾げて
雅客は氤氳と流れる香を聽くのであつた。

―一九三七年霜月下浣・楓月庵―

室内素描

男の子は巧に牝鷄の啼く眞似をやる
冷えた湯婆の卵をかかえて……。

（南の窓に腹を伸して寢そべつてゐるのは怠惰な手風琴だ）

疲れぬ夫婦は焦げた半生の着物を脫ぐ
美しい埃の沈澱した朝の部室で……。

（北の窓に嚴しく結晶するのは夜もすがら歌ひつゞけた
オルガンの吹雪だ）

鸚鵡

エルネエスト・プレヴオ

濡れた外套から氷雨の露が光り落ち
瞳に眩ゆい電燈の輝き……
かくて君の睡た氣な瞼のあたり
灰色の翅を動かす小さいリボン……。

かつて私は君に詩集を贈らうとも思つた。
そして北風の荒ぶ寒夜の街區を
獸のやうに彷徨ふたのだ。
またしても私は惱むのだつた、

あの心優しい人々の手でさへも描くといふ
柊の葉に似た鋭い魂の闘爭を……。
そして私はこの輕小な詩集の裡に
自らの眞の心を封じて了つた。

もはや晴れ渡つた碧空のやう
すべての惱みはぬぐはれたやう……。
私たちの樂しい一瞬の音樂も
あの遠い夢に結ぶ逢曳の痕も

そして回想の力も湧かない無氣味よ。

もはや澄んだ碧空に身も心も舊い……
君よ、私は詩集の代に一匹の元氣な鸚鵡を贈ら
うと思ふ.
すべては煙や雲のやうに消えはてた
けれど優しい君の聲音は今も變らぬ響を有つ

明日の朝はやく、桃色の靄を踏んで
一匹の元氣な鸚鵡を求めよう。
あの君の言葉と聲、不滅の音樂のやうな
あゝ、それを記憶へて繰りかへす
白い鸚鵡、それは詩集よりも美しい
あれこそ、生きた君への唯一の贈物だ。

踊子

ポオホル・ジヤン・トウレ

灰色の靴下に生毛が吸ひつく
火の輪がくるくる熱病患者
黄金虫の落ちる音が聽える

剛慾な色情がざらざら光つて
音樂の嵐に笞の唸りが飛び
小麥色の凸凹貌が經歴の汗を流す

帽子と秘史

ジャック・デイソホウル

禿頭の後に白い帽子の乙女が動く
高い玄關の闕に立つ不平顔のマダム
籠に盛られた白菜、左手に勘定書
危險信號を想ふ赤いベレ帽

★　★　★

二階のカアテンに歴史の議論
— C'est a mon insu
蝶の翅に畫く傾城祕史

註 — それは私の存ぜぬ事 —

★譯註 M・K★

エルネエスト・プレヴォ（Ernest Prevost）は詩集「愛の詩」で哀歌詩人としての才能を示し、「傾ける魂」に荘重な風格を顯はし、「久遠の友の書」に於て微妙な階調と最新な意向とを想はせた本格的な高蹋派に屬する詩人であるが、このやうな機智に富むだ肉付と澄測の内心とを示す作も彼の特異な点であらう。

ポォポル・ジヤン・トウレ（Paul-Jean Toulet）ジヤツク・デイソホウル（Jacques Dyssord）の二人は共に幻想派（ファンテイジスト）に屬する詩人で、前者は逆説、皮肉、懐疑の傾向を有し「反韻の詩」といふ詩集の輕快な韻律で知られてゐる。後者はヘハインリツヒ・ハイネに似た哀痛な感受性と辛辣な皮肉とを帶び、詩集「テノォル歌手の最後の歌」がある。之の派は現代詩の特徴とも見るべき奇智、ユーモア等を含有してゐるもので、しかもそれは單なる浪漫的感情、單なる機智ではなく詩の對象から受ける美しい直觀に基調を置き、そこに繪畫的な獨自の幻想を喚起するといふ手法である。

群雲

熾木由美

大きな手を持つ雲の一群
開港地帶の雪景を想はせて、思想もなく、飛躍もなく、石膏に包まれて、君等のひろい前額よ。
次から次へ幻の湖を運んでくる蒼い房のやうに浮薄な君等のつぶやきよ。
蜜蜂が羽をたゝむ。風鈴が泣きやむで、封筒の中から
——夜の匂ひがこぼれ出す。
——あゝ一日は終つてしまつたのだ。
たそがれ前、やつと君等はよれよれの舌に、水蜜を求めるのか。
さうだ！
物語のページは、君等の漂流を待つてゐる。
だんろのある未亡人の室へ、眞直にかへりたまへ。
角度をとり違へて、谷間の小屋へ沈まぬやうに、いそいで母の乳房へかへりたまへ。
雲よ。雲よ
いちにち私と卓をかこむで　お前らは眞珠の國を
教へてくれた。
盡きない話題を銀盆にのせて。
突然　大洋を航することの出來ない病弱な船體が、
止まつたブランコの如く、一さんに落ちてゆく——。
すべては解澤し、くれなひのボタンをはめた逞ましき終焉となる……

翌朝

巨大なる扇風機に、あふられて
葡萄畑は、目茶目茶になつた。

湖上の小さな別荘よ。
らせん形のアーチ
白金のやうに、土曜日のやうに
ひかり始めた階段のてすり。

太陽がスタイル・ブックから最新の婚禮衣裳をつけて現はれた。

森はアスパラガスのやうに、みづみづしくかゞやき

初め、拾つたぶだうの粒は
ジーンと透けて　種まで酢つぱい。
日記の中の萎んだ花も　遠慮したやうに吐息つく。

さん・さん・とまぶしきものよ、
おしなべて、太陽の偉大な性格を記憶せよ。

困惑したあの一夜は無事に燈臺を仰ぐことが出來た
ロープの影…みづの影…塔の影…影…影

かがり火のやうにわれわれは平和を愛する朝だ！
太陽の子は負けない。
貝殼の中から、海岸線のひゞきがふれ合ふ。
白い圓柱をすりぬけて、風が迎へにやつてくる。
すると獅子を連れたギリシヤ的風俗畫が、ゆるやかに廻轉し始め、男は肩に空をのせてゆく。

風邪色

長谷雄京二

指タチノ隙間ヲカム
傷ツイタ若蜂ノゾキ
白イパンツハタメク

腋シタヲ綠ノアスパラガサス
蝸牛ノトキ色ガ混凝土ヲハフ

ハナカム

ワナナク
カアテンラノヤウニ
海港ニ殆(チカ)イ

ダン爐ヒラク
タイ陽サカエ
センチメンタリストマダム

空の色

小池亮夫

1

片方が深い碧
片方が濁つた蠟の色
一体どちらの目でものを見る

いや、どちらの目でものを見たい
この不具者の目、常に虚空を見詰め
永久にものを見てはならない目と
永久にものを見なければならない目とが
大いなり、宇宙に滿ちて。

2

風は
泣叫び、怒り、狂ひ
果ては蹴破り
嗟呼、されど
一人、芥は空に昇り
美しい天の衣となつた。

青い空氣

小林正純

狹い六疊の部屋に菫色の流れが一條はいつてきた
私は扉を開いて疲れ果つた腕をそつと差し出す、と
私の掌には温いおもみが加えられた
それはピンクで彩られた一ひらの葩だつた
× ×
けれど昨夜の夢想が雷鳴の煌きに醉つた腦髓が
ひたすら風吹く綠樹のゆずぶりに以た惱みで白い夜
が進むにつれてしつとり濕れた感情が冷やされてゐ
つた
冷やされて
唯ひとり青い空氣を吸つてゐた

女の顔

媚びた眉毛は變型に造られた暗室にある門の様に謎
があります、まだらクリーム色に染められて白猫畫、
そんな皮膚です、蘩蔞のコルセットに似通つてゐる

畫室

ひと束のお白粉花　アトリエに持ち來り　簡素なス
ケツチを試みる間にも、澱んだ空氣、色を探す刷毛
の暴力に　いらいらと　匂ひ擴がり　ひとつひとつ
萎れてゆく
足ふんばり兩手をのばし　いきづかひもあらくわが
花を素描する、なめらかな凹凸を持つチューヴの肌
オレンジュのルージュは飢え死んだ兎の血じやない
か、アダリンは漂つてあたりの空氣は私の神經を尖
らせます窓ガラスに頭をぶち附けて寫るスタイルを
破壞したく思ひます然し桃色の絹は舐める様に私を
襲ひます　あゝ死にそうな赤い吐息をして葡ひ逃げ
る私のシルエツトを御覽んなさい　ジルトよ　ジル
トよ　赦して下さい

竹内一

はつぎつぎと花のかたちを受胎してゆく
ふつとわれ知らず畫筆が滑り奇体なしみを描いてし
まふが　お白粉花はそのとりどりの色故にカンヴア
スの自己をほのぼのと愛しはじめる
雷鳴さむざむとひゞく畫室のなか　デツサンをかい

ては破り燃やしてしまひふてぶてしく笑ふのであるがやがてはめをつむつて筆を動かし花びらと花びらの接吻は見まいとする

色んなものがゆれてゐるほゝえんでゐるひかりの中で描くことが樂しくてならぬ、敵地に乘り込むスパイの氣持ちを保ちながら　いつはりのポーズにみちた花びらたちをくすぐつてみる

畫室の窓閉めてもまた開ける、ちりちりとところよい油のひろがり、繪具の色になじみ切つた生活であつてしかもぐんにやりと眠つてしまつたモデルの前に夜中から朝への筆をつゞける

あけ方はうすら笑ひに一つの現象として夢を見る、ひときわ窓があかるくなりその光りは金にも譬へられやう、花の死骸をかい抱き抱きしめ　したしたとあさ霧に兩手を濡らすなんのくつたくもなく描きつゞけられる日が來ようとは思へぬ、前科者の樣にかげをうかゞひ　云ひ譯けひとつ出來ないカンヴアスの明るさ、忘れてゐた一筆を書き加へたとき　部屋は狹まり　ゆるやかにのぼる葉脈の血だ

法城

渡邊和郎

法城の季節はいつも倦怠で粉飾される。

牛の歩みが人間のいのちの殘りを腹一杯に反芻してゐようと、その臆恚な眼に對しても、法城はどこまでも無關心である。

空にある骨のかずくが、

この宮殿に向つて突撃し或は愁々として歩まうと、法城はぎ然として弛緩した心を引き締め樣ともしない。

私がそれを一つのニヒルと見ようと、眼の前に牛の如き實體がある限りは、いゝ、きつと法城は偉大な花を隱してゐるに違ひない。

青空に白鳩の動悸が聞へる。

それを悲劇と見ようが、喜劇と見ようが、法城の季節は一切に無關心である。

猿酒

八乙女猿助

ふかみたる秋なれば
ちぎれ白雲いさゝかは飛び飛び
酒つくる深山の谷に陽のこぼれ
柴子栗、つぶら葡萄や房あけび
ちび猿の手肺あまた盛り盛りあつむ
溪の水顆にふくみて木洞にそゝぐ

さむざむとやがて冬
いさゝかの粉雪ふりやみもせず
ひねもすは猿のやからの宴なり

熟るゝ酒みな木洞
手肺に盛り盛りくみてすゝるなり
喧操きえし谷まの夜半に
よぼ猿のあまた痴れて凍ゆ

遠い悲しみ

人嗅は暗い洞窟を壓迫した
なみだは唯滿月への思慕であり
叱咤された意志は權威をくひきざみ
盲獸のごとく荒ぶ木枯へ挑んだ

相常住

——白萩によせて——

吉野多美子

かぜに
滴りしろく
こばれがに
花ことごとの枝

このいのち
そのいのち

一ならず
異ならず

われひそかに
信ずる人のありて

ふたつの名
おなじならねど。

秋冷

雨に夕ぐれの來て
たれとわかれか

菊に咳(しわぶき)など
へやにあつて

たがあつき
茶を沸かさんといふ

かたかげる灯(ひ)の

なにのしづまぬこゝろぞ

無軌道市街

（九月九日祖母逝く）

國廣勝太郎

シグナルは赤、赤だと云ふのに——
舗道を絶え間なく流れゆく怪物、音騒音！
交叉点で後足を擴げ、放尿する白い馬
「畜生ッ！」馬方の鞭は油ぎつてゐる
濡れてギラギラ光る、アスファルトの上を踏みにじ
つてゆく、銀色のバス　タクシイの群！

何處まで狂奔するのか、水銀柱は——
大都の眞晝は、蒼白いビルの吐息でもある
お天んとうさまが、あくびをして御座る
世紀の生んだ文化の惱、めぐるましい狂騒曲に——
シグナルは赤、赤だと云ふのに
とゞめなく時のながれゆく、無軌道市街。

白き臥床

（わがコスモスと白薔薇に）

津坂霞

TO YSISTER MISS HISAE.

白き臥床は常に淸く新らしい

君の限りなき思ひを秘めた可憐のコスモスが新鮮な
リンゴと共に匂ふ

それは私の唯一の音楽であり、詩であり
明日への太陽でもある

白き臥床は樂しい
窓越しに星がまたゝく

TO E. SISTER MISS YURIKO.

白き臥床は常に新らしく豊潤だ
御身の偉大な情熱を秘めた冷徹な白ばらがその香ぐはしき眸に匂ふ
それは私の唯一の羅針であり　柔らかきなぐさめでもある

白き臥床に月光が這ふ
明日も晴れるであらう

金鯱怪盗

武藤和夫

寒月を突いて
黒く聳え立つてゐる　大名古屋城
その屋上へ蜘蛛のやうに匍ひあがつてゆく
怪盗ひとり
地上百尺の城廓のてつぺんに
飛鳥の身を躍らして

金鯱の金網のなかに
栗鼠のやうにもぐり込む
不可思議なるその影法師
沈まりゆく百萬市民の寢息を掠めて
みごと剝ぎ取つてゆく黄金の鱗五十八枚
ふたたび薄氣味わるい山吹色の風呂敷づゝみを背負

ひ込んで
猿のやうに高層の天主閣を辷り降り
悠然と城門の閂を外して

鷗

丸山吉三郎

今日は風だ
平穏な海に
キラ〳〵と陽光が流れてゐる

沖に
碇泊する
幾隻かの汽船

西方に
みよしをむけた
のろい帆船——

いづこともなく煙を捲いてのがれて行つた
あやしげな賊、今様、柿の木金助

（一九三七二月）

發動機船が
喧騒な
響をたてゝ
はしる

鷗の群が低く高く
愉しさうに
飛び廻つてゐる

港で
疲れた翼を憩ふ

鷗の一群

ふわ〳〵と
海面に浮ぶ鷗は
まるで
ちぎつた綿のやうだ

渺茫たる
海洋の
大空を
飛翔する鷗よ

遊び戯れ
疲れたら
海面に憩ふ
鷗よ
俺はお前に
憧憬の眸をすえる

鷗よ
幸福な
鷗よ！

裏街

ガラス戸に　ピツタリと
身をよせてゐる
うすら寒さ

此處にも
晩秋の果實が落ちてゐる

梅澤恒夫

鰯の入つた
生活の鬪ぎよ
何處に　明るい花が咲いてゐやう

すべては蜥蜴のやうに素早く
私の眼に刺青と成つては
パラノイアの音色を發てるではないか……

青銅色の紐

天穹の、爛熟れて
夢に浮ぶ
青銅色の紐

それは
魅入る樣に
私の胸を窺き込み

鳴嗟！　雨に腐つた軒下から
魚の臭ひがする
裸のまゝの聲がする

そして
歩いて行く私の靴までが
どろんこである

その冷たい掌で
私の魂を攫んだ

ゆら〳〵と天心にかゝり
白銀に　輝いて
繞り　下るものよ

宗武爲康

私は　逃れられない——
ぢつと眼を瞑つて
蛆虫の様に蹲まり
柔かく喰ひ入る
黄色い　生きものゝ重壓に
蠢めき　轉ぶ

軈て
それは　天体の一点に向つて
昇り始める——
黄金色の蛇の舌の様に

きら〳〵と搖れながら
あゝ青銅色の紐よ
ぽつかりと開いた天心に
幕地に　昇り行くものよ

私は
灰色の殻となつて
燭火の消えた
石の框に　横はる

流れ

小松茂彦

わたしの周りに絶えず羽音かなしく飛び交ふ孤獨な
天使
落葉色の風景のなかをそなたの道は遠くたそがれの
方へつゞいてゐるね
そしていつも嘘しか映さない純潔
はてしない流れを受ける流れのやうに

わたしは日毎とゝのへねばならない
そなたの涙のために眞新しい一ダースほどのハンカチーフを
もうわたしは後悔などしてはいけないのだ
そなたの取りすがるこの覺束ない足どりがどこへわたしを運ばうと
だが御覽
空ばかりがなぜあんなに明るいのか
つめたく風にかゞやく光り
磧の石くれにも落ちかゝる青
時としてひらめくそなたの眼ざしのやうにとりすま
したあの人々の眉毛を覆ふ眼鏡のやうに
つゝましい祈りに天上を指す白髪の祖先達
點々とこぼれるくれなゐの血の滴りのながで
家系圖はいつさい焚かれねばならないだらう
身近かな唄はいつさい閉されねばならないだらう
あゝ　もつとこちらへお寄り
茜に染まる小鳥らの影のやうに
どこかわびしいこの心を埋めるためにも
そつと刻まねばならぬ思ひがわたしを駈るのだ
傷つきやすいそなたの額にくちびる型の愛情を

微笑花

大山敦五

しづかな初會
おまへの瞳とわたしの瞳との握手
子供の心に還つた微笑は
可憐な花辨となつてわたしに降つた。

沈默のまゝ、わたしに降りしきる
お前の微笑の花々……
たが、その意味はわからない
たゞ、樂しい疑惑の裡に……。

お前はなほも笑ふ
それは幸福を意味するだらうか、
それはとても幸福さうに見える
何故なら私の心近くにもお前の微笑の花々は吹きつけてくるから

銀線の息吹の風とともに。
もしもお前の身が幼かつたなら
私は強い抱擁と接吻とを
お前に饗應するであらう。
たが、お前は美しい年頃の麗花だ
私は悲しい野心の杖をすてる
たゞ梢の花……微笑の花辨の中に
「わたし」といふ不幸な人の子を浚ぎ入れる。

—「思ひ出の唄」より—

傳習

小田邦雄

日日
虚妄のなかに堆積し億萬の生物たちに萬象に惡態を吐くのだ。つまりは日記。
商算も天の攝理の尨大に沈淪し、
嗤笑へと云へば世事はかほど迂愚なのだ。
畢竟生計に近し。
劫初からの無盡のはつぱのおどろおどろの凄じく。

倫理や道德や八百萬神々のへどの如き澁面や日頃倨傲に原罪のあれらを累積し、
生物は己れに牙をかける日常なのだ。
神々とは無爲の時空のアトムのむらむら。またはギレンパ。
己れは己れの直なる迷妄に坐し、けれども苛酷にひつぱたき、
刑罰のごとく
修羅のごとく
三千大世界のものみな愚痴を云ひ云ひ、
無限劫の神呪の裔のかなしい知慧の傳習なのだ。
おお火どろ。
天は天。
己れは己れを審判くのだ。
惡德と、善德と、人は念怒り、手をあげ、みぢろぎもせず、犇めき。
つららは燃える、血みどろの歴史を、熱愛を、その相剋。
宇宙傾ける屋台骨
天の唾きのよどみ流るる。唸、唸。
おおよし。生はどろどろに

（川合猛に）

六月の海邊

上松ちか子

六月の蒼空
ふわふわと白いちぎれ雲が南へ流れる
愁の傳說を祕めた海の碧
水平の涯に浮ぶ二雙の白い鷗

砂濱に網をつゞくる漁師
子蟹の足をちぎつて遊ぶ濱の子ども
ピイチパラソルとカンカン帽の私語

仙臺にて

伊野亨二

電車通りから横町へ折れたやうな靜けさ
デパートが開店記念福引大賣出しをやる
この靜けさの中で
生えぬきの人たちは
バナナがたたき賣られ
氣味のわるい靜けさを知らない
魚屋が鰯をふれてあるき
あゝ私は素ッ裸になつて
思ひ切り海の腸を探ぐつてみたい

風のない部屋

田中國男

煙草のけむりが
面影を描き
私より去らうともしない
あなたの思惟
煙草のけむりが
私の運命の惡戯を歌ふ。

ろんぐ・ふおあ

夜の光りが
窓掛に映す影繪
夜の調は美しく
夜の面影はしめやかに。

吉成糸子

十月と樹液

寂しさにふと見上げた空は何處までも碧かつた十月の初めに——滿々しい杉の樹液を前に私はしばし默想する。
夜の婚禮を目のあたり見つめて來た樹液よ、そなたは哀しい性。植物性のニヒルをそつとかみしめて語ろうとはしないのか。
雨に敲かれ風に吹き曝されて來た、その巨木に、哀しい幾星霜を追想しながら、ある時は華やかな星の七彩の美しいあきらめのその中で、夜となく晝となく滾々と湧きいづる樹液よ、お前はぢつと夜空をみつめる時、蒼白い吐息を洩してゐやしないのか。

追憶の糧

牧博美

ローソクの灯は古典的です
私は洋燈のない部屋に一本のローソクを燭してめい

もくする
すると遠のいてゐた私の腦裏にむかしの君のぬれたまつげが匂つてくる
クラシカルな光の中に喪失しかけてゐた若い日の戀がリリカシイ香りをたゞよわせ乍らチロチロと燃えてくる
洋燈のない部屋に私は私の持つ唯一のローソクを追憶の糧として愛撫するのです

おんな

ある日

俺は自殺しようと思つて劇薬をふところにして酒をのんでゐた
すると頭がボーツとなつて俺は陽氣な歌を唄つた
すると俺は自殺するのが馬鹿らしくなつたので女のところへ歸えつていつた
女は俺をむかえてくれたが話しをするでもなし唇をくれるでもなしたゞだまつてうつむいてゐたので俺はそつと劇薬を手渡して歸へつた
おんなはその夜から別の女になつて俺のふところで唄つてゐた

貝殻低唱

江越馨

1

月の出を俟たず夜はそつと開く
冷たく砂丘を枕に仰ぐ私は貝殻であつた。

2

たへまなく打ち上げ打ち下す波浪よ、
おん身は萎びた大人か、戀の漁夫か？

生活の簾、白絹の波に似て。

3

白い敷布を汚す愛花の微笑、それによつと泣く木枯よ、

吐息

沖田廸

ほのかにも
葡萄の饐ゆる香のたちて
女の瞳
しづかに燃ゆる
たまゆらゆ
ひそやかに夜窓にもらす。
我が吐息なり、
砂の褥、星凍へて高く。

4

濡れた睫は朝日を亨けて
いま第一頁を開く私は貝殻であつた。

待春

雪降れば忍び音になるピアノなれ
灯影とぼしきカーテンの
觸りなば　ゆれよ　シルエツト
白き影して君が指の
おどる　うつつを雪降れり
雪や降りつゝ　倚るものに
もつれ　くづおれ　なげきそめにけり。

氷菓子

山章郎

ガラスの器に　流れ行く時につれて　消えゆく氷菓子に
見つめる私の視線がふとそれて　窓外を見る
嵐だ　人の浪が荒れいらだつて　いらだつ人々の顔が
返した視線に沿つて氷菓子に映える
スプーンの先から落ちる滴も　激しく音をたてゝ異妖に響く
自分一人であつたかも知れない
他の人々にはたまゆらと聞えたかも知れない
思索が深くなるにつれて　嵐は強くなる
ベーヴメントの眞中に　マンホールが廻る　永久に
嵐と憔悴の涙に濡れて

堀に立てる夜景

亀井義男

投けられた波紋が大きくゆれて消えて行つた
投げた石が堀のどろ底へぐんぐんくいこんで行つた
そよかぜがかすか舟かげにまでひそみ　水面にゆれて流れる夜の景

橋のなかほどまで來た
いま一度石を力いつぱいに投げてみた
ひろがつてゆく水の輪
ゆるゆる大きく
石は水をやぶつてどこまで止めをさしたかくいこんで行つた
どこかで　秋ちかい蟲が檻禮のオルガンを引いてゐた

事務室から

蝗が子供に片足を折られてしまつたやうに強く踏むと痛みはますばかり
片足だけでどうやら　やうやく歩くことができる

ひごこし

入江伸

「主部」

春　貘は「たたかい」の響に眠りその媚態には氣がつかぬ
窓は午後から夕立が降りだした
やかましいほど事務室の　たいぷらいたあは動いてるにくいほど片足が病める
椅子の上に座つてみたがやはり痛い
神經痛だと　今朝家を出てくるとききかされたが
窓をやぶるやうな雨をみてゐると神經がいらいらしてきた
霧のやうに　いちめん蒼白くつつまれてしまつた雨の街をバスがゆれて行つた
窓をしめてゐるから室はむし暑く　たいぷらいたあがしめつぽいとの話が聞えてくる
机の上の芥子の花がうなだれてた
私の痛い片足はにくいほど腫あがつてゐた

冬　高貴な伯爵夫人は　まひる時に足を組んで煙草
を　お喫ひになる

「伴奏部」

惑溺のなき　この春なれば
名もしらぬ　四枚葉の草が
人跡末踏の　岩の上に
生え
邊りの大氣を微塵も動かさぬ
その　營々たる　いとなみ　の白さに

四枚葉が　五枚になり
秋が來て　五枚の葉が散り
いつもの　日が照る

惑溺のなき　この春なれば
名も知らぬ　木の葉が匂ひ
直ぐ消える　匂ひのために
誰も氣付ぬ　匂ひのゆえに
つよい風が　根絶やさんと
はんねんの　悪徳をつくす

橇鈴の鳴る夜

鎌田安雄

しろい神々を呼ぶかのやうに鈴をならして
しろい帽子をかぶつた樹々の間を
天鵞絨の帽子をかぶつた老人の橇が縫つてゆきまし
た
わたしは神話のなかをあるいてゐるかのやうで
それといふのも鈴の唄が天にちかいからでせうか

夕べ　美しい粉雪がちらちらふつて
丘の聖院にお祈禱りをしてゐるまに
私も人びともひつそりそのまゝ死んでゆくのだそう
です
私もひとびとも埋もるゝことも記憶して
故郷の明るい窓々にさようならをするのです
美しい夕べ
粉雪がちらちらちらちらちら抒情の掌のやうに
モナ・リザの笑ひのやうに降つてゐました
マリアナよ　明日はあなたがおたちなの
明後日は私の番かしら

Xマス近く

ヴェランダにでて御覽なさい
マリアナさんよ
白銀(しろがね)いろの月光が
そら
もうあなたのドレスを
林のなかで縫ひあげるところですよ
クリマスが來るんだもの
たれが嘘をいふもんですか
あなたの頬ずりにもにた粉雪がふつて
美しい晩に　幸福な晩に
今年も私は乞食の役だろうか。

詩書管見

梶浦正之

アポリネエルの人間の脚に似た車輪の運行が超現實の軌道を漠とした觀念に導いて了つた。この國の前衞派の詩人は主知派の命題をフォルマリスムの代名詞として華かな聯想のモザイクに陶醉しつゝ之の一幕物を閉場しようとしてゐる。他方には大正期の自由詩の角度とフォルムを今尙保守しつゝ人生と自然との定律的な常識感を顯はすに其の詩生活を瞰す一群の枯淡な花々が咲き競ふてゐる。

北園克衞の「夏の手紙」は前群の空氣を膨脹させて純粹詩の風船玉を破裂させて更に其處から余韻と陰影の尾を曳く新世界を生まんとする苦悶の姿態で登場した。

少年たちは石のやうに固い頭に汗を出す一匹の蜥蜴が雜草の上でゾリンゲンのナイフのやうに跳ねかへる。
楓の葉の下で小川の水がゼリイのやうに顫へる。

この透明な思念の器は恐らく之以上の言葉の果物を盛り得ないであらう。淡白なウェフアは微妙な自らの味覺を含有してはゐるが、しかし、それは決してクリイムの添物や刺身のツマの如き役割に始終するものであつてはならない。この著者の今後の動向は特に注目すべき必要があらう

聯想の新鮮を追ふは詩歌進展の原動力である。そしてこの肯定は一つの冒險を伴ふ。それは聯想の技術(メトリック)が一篇の詩の內容的聯想の數々の有機的關係を讀者に强要する場合を指す

新人山田有勝の「季節の肌」は明かに之の危險に曝されてゐる。

黃色の化學が水色の昇降機を產むするとリンゴと蛇などが火山脈の下で低空飛行を開始する。先づ水晶の庭から始めて、視野は赤い羽毛の影と昇華を試みる岩壁などの爲に二度と廻轉しない一滴の胎兒である。

更に前述の危險を回避する努力は逆轉して常識的聯想の肉付に止まる悲しい二重の冒險にクローズアップされる。若くして逝いた北海の上戸米秀雄の「天使的な職業」は殘念ながら之の好例である。

アナタが停留するハナが靜かに開く朝。ワタシの內部の氣流は秘めやかなホテルの窓「武裝した微溫植物の夢のクッションからは美しいウタがつゞく」ワタシは買物の出來る蝶になりたい。アナタは完全にワタシの氣象學を識つてゐる

之の構成は「日曜日の太陽」といふ題命の生むハレイションの余光である。此處にはこの著者の慧敏な感覺が銀鱗のやうに踊つてゐるのみた。前衞派に屬する詩人として之等の危險性を巧妙に脫出してゐるものとして村野四郎と津瀨準とを擧げる事が出來よう。それと同時に前者は其の主義の立場より幾分言葉の肉付的豊饒のため一脈の弛緩を示してゐる嫌があり、亦後者は氷凍の詩品たらしめむとする單純化のため幾分の固型的觀念を與へる缺点がある事も認めなければならないのであるが、とまれこの二詩人は安心して讀める人である事は確定的である。

新現實派の一峯を示すものとして淺井十三郎の「斷層」が出た。逞しき意欲は猛き現實を攫む觀点に於て吾々の詩門は開かれた。しかし、之も自らの詩境の轉換期を破る一つの試金石である。動から靜へ、靜から動への運行は明かに認めねばならぬ內的定律であらう。淺井十三郎の「斷層」一卷も之の觀点に於て讀まるべきである。若し彼にして今一歩の方法論的技術の練磨を備へてゐたならば、恐らく之の詩集は新現實派の一頂点を示し得へたであらう。

ほんとたうに自分を知り盡すことが出來るものだらうか
ぽつねんとさりのこされた石ころ
のやうにわびしくかなしく
一天の靑。

純情のヴェールを透して自由詩のアドバルーンを望むものに白井忠男の「電話」がある。この若き著者の才氣が煥發することを抑制された自由詩の人生觀に逡巡してゐるのは愼に遺憾である。その角度 轉換の氣力と作品の壓縮的技術とを切に望む次第だ。その他舊刊に屬するが武藤和夫の「裸像」も同類の忠告を施す事が出來る。しかし武藤君は短詩の巧妙性に於て幾分の位置を示してゐる。パンフレット「若き鬪爭」を出した奈良進も淺井十三郎と同樣の事が謂へる。奈良君にはむしろ、肉付の單純化に依る緊張性を望むべきであらう。

海外詩の研究素材として佐藤清の「T・S・エリオット詩、研究」が出

版された。批評家としてのエリオットは文學のあらゆる分野に於て問題とされたが、彼の詩の研究としては恐らく之が嚆矢であらう。四六版百余頁の小册子であるが、「批評家としてのエリオット」「詩人としての彼」並に其の詩評釋が附せられ彼の輪廓を示す事に苦心したよき著述である。平易な言葉で深淵な意味のトリックを的確に表現する處新らしい英國のゲエテとも謂ふべき之の詩人の詩は頗る難解とされてはゐるが佐藤清のプロフエサア的筆致はよく之を評釋してゐる。乍然、エリオットの詩の批判的解釋が何ら述べられてゐないのは愼に遺憾である。エリオットの詩に就いては筆者も改めて意見を發表する意向であるから此處ではこの書の單なる紹介に止めて置く。

ミス・ナンシイ・エリコットは大股に丘陵を横ぎつてそれを碎いた、

乘馬で丘陵を横ぎつてそれを碎いた、——荒れたニユウ・インゲランドの丘陵を——乘馬で獵犬のあとを追ひ、
牝牛の牧場を越え。

ミス・ナンシイ・エリコットは吹かした、そしてあらゆる近代のダンスをダンスした、そしてをばさんたちはどんな感じだかよくわからなかつた。
だが、近代的だといふことはわかつてゐた。

硝子の棚の上で見張つてゐるのはマツシユヒワルドウ、信仰の保護者、
不變なる律法の軍隊であつた。

それから吾國文學の外國譯としての紹介が日佛文化聯絡協會の人々の手に依り行はれた。「日本文學史」の佛譯は古代より一九三五年に到る沿革で、詩歌に關係深い項目は古代文學に於ける歌謠、奈良朝の萬葉集、平安朝の古今集、鎌倉時代の詩歌、南北朝及室町時代の小唄と俳諧、江戸德川期の詩歌俳諧で、第二部に到つて現代文學の革命を筆頭に、明治時代の新体詩、新短歌の勃興、大正期の自由詩等に及んでゐる。之は巴里マルフエールから刊行されたが頗る好評である。

それから松尾邦之助の佛譯本を下位春吉とゲラルド・マローネの協力に依り一九二六年に刊行された伊太利語「日本詩人選集」は今度ユーゴオ・スラビア版が出顯した。匈牙利ブダペスト・ロイド紙上に於てアントン・ラドウが「近代日本が對世界的政策に於て、大きな役目を示してゐるにも拘らず、我々が日本の新らしい詩に對して、それ程の認識をもつてゐないと言ふことは不思議である」と謂つてゐる如く、之等の紹介本は現代日本詩が國際的舞台に檢討さるべき最初の文獻となるであらう。

★試作欄★

或る一つの離別（エピローグ）

榎本浩之輔

——さりげなく男は口笛を吹いて
去つた

巧みな　男の饒舌の反芻
すでに……
女は　靜かに面紗（ベエール）を徐き
最后の接吻を與えようとする
白々しい沈默のその瞬間である
じつと何かを見究め樣とする
峻烈な瞳であつた
新しく生きむ　と

躰（たい）軀（おん）

田中林彌

指（ゆび）ちかく母の躰温を
脈搏（う）つ血管に感じ
果實の光彩はわたしの胸憶（おもひ）を埋めた
むせつぽい室内の霧圍氣（くなり）の匂ひ
その濕度に水銀は無乾燥の上層部へと奔騰してゆく
フラスコにさゝれた
C……の蒸溜水の堪へてゐる植物の影
睡眠におちる肉躰の表情は

檢温器を眩ゆく屈折させて額まで銀で彩める

秋の光線は玻璃戸のフラスコに
八つ手の葉を反影させる
ゆがんだ影像にうつる生命譜は
滴るままに宿命をまかせ
微かすに葉脈を翳す時刻の流れが季節の殼を掠める

心境

松本祐順

——友へ——

徒らに鬱積する核心を忘れた苦悶の泥土
白飯の見事さに眼をまはした食慾の眩しさ
昨日が先月であつたとて
連續してゐる今日である——
變化があつたら顏の光澤にうなづきを與へよ
しめり切つた刻み煙草を
やにいつぱいきせるにつめて
水の感覺を煙から味ふ頼りない重たさよ

（空間を區切るコンパスが出來たら買手の第一番は
僕だらう）
父の亡骸が未だに心配な心を笑ふまい
ひねりつぶした蚤から赤い血がとび出した
灸つぼを自分で燒いて
顰面を明日にのばす
（ほうり出された書物が風の中で醉つてゐる）
今夜は月の出ない夜
吁々友よ、警めを送つた友よ
せめては障子の紙の歪みに
數日の雨を偲んでくれ。

白日夢

藤浪星子

1

白日の追憶は
　靜かな昇天を知つてゐる。

2

うすあかい空とほく

ほそ〳〵と三ケ月が浮ぶ頃
白日の想は靜かに昇天する。

3

あゝ亂れ飛ぶ
追憶のない流浪民の群よ
追はれ行く鴉の移動部隊よ。

4

星が二つ三つ四つ……
思索は未完成の海圖をあえびながら……
萎へたる白日夢は夢空に一條の
青白い光芒を描いて消え去つた……。

山路行

花山正也

むづがゆい若芽の
軟かい南風に眼覺める頃ともなれば
青年の胸に訪れるものは
山路行の翼である。
青苔のすべる岩、はにかむ白百合
そして、ちよつと寂しい心。
石楠花のいぢらしい微笑も
まつさをな空と青葉との境に飛び消え
谷川の流、ひとり
さんさんと掌を振る太陽に唄ふ。

時計

加藤銀一

『啜り泣き』と『笑ひ』が彼の持つ感情。
嘘の人生を舞踏場として
リズムは輕くホールに流れ、
線と影の踊りに沈默が續く。
彼にとつては情熱も希望も、夢想も、
一個の悲しい齒車だ。
苦痛を過ぎた夕暮時に
彼の掻き鳴らすジヤズと悲歌は
墓地の堅い扉の中。

絶望

大橋勝利

眞黑―― な穹窿。冷酒。
ポイントは……閃光。冷たい川底を泳ぐ魚。
握りつぶすことの出來ぬ悲しさ……
ポイントは摑んでない――
なんと言ふ!! 悲しい言葉なんだらう!!
測々――と逼る、 冷酷。
想念は―― 卍
胸を、引裂く――
ポイントは……閃光。裂罅の小石。
お――わしには摑めない。

夏日記

幸子

無限の大海に
巨人達の濯ぐ浮色のベールを
打ち振つて
鮮血のつぶてを投げられた
青銅のはやぶさ、空駈けて去ればしひたげられしいたましき土牆光と共に騒音を送る
憎悪をこめた巨人のひとみ
いすくめられてたふるゝふろうしやボ――
まののびた、おとりの彷徨にさへ
疲れた野獸達は歡聲を上げる
あざむかれし無智の雄さけび
地球は夢を乘せて昇天した
えんそ 悔恨 のろひの惡靈
黑き手上げてあざけり笑ふ
たゞ暗黑とのろひと海瀟
默々とつ立つは
はるか山頂の天文臺か。

朝

加藤靜夜

曉の子は
ねぐらを離れて
歡喜の聲を上げた
魚鱗の影下にまどろむ民衆
金色の窓に諸手を上げ
空間に飜へる恩念をとらへ
現實の生息のいたみにおびへ
生命の道に足跡止む
永遠に冷えきつた水の上を流れ去つた。
ぐつしよりと濡らされた無花果は
ほろ〳〵と露をおとし
いひしれぬ悲哀を
胸のすみ〴〵まで響きわたらせ、
川の流れに蒼白い顏全体を
無理にもおしつけようとしてゐる。
枯葉の上にたゞずんでみつめる時
私は
ふとふれた風が彼の人の皮帶に似てゐるのを感じた

暗い風の記憶

野田久子

素足に冷たい冬の陽のさすある日、
風にさからつて歩く一人の少女は
川に流れる一羽の鷄の屍を
無花果の陰に見出した。
どこに行くかも知れないその屍は

低氣壓(港)

青木顯

防波堤を嚙む浪は
皓い亂喰い齒を剝き出し
マストは
はげしいぜんそくの悶え
船體はシツカとブイに縋る

（層）

街街に　電線をしごきつゝ
北海で冷却した夏は戻る
南海は夏の再製に多忙でしよう

闇

加藤嘉保

夕くれ
道は白い起伏のまま
山脈とともにあつた、

朽ちた木柵が歴史の表面に
たんねんに其の影を刻みつけ
干枯びた馬糞の中に金蠅は産卵をする、

風には煙硝の匂ひがあつた
空は濁つた瞳の色
星だけは今宵金色に輝やいた

——あゝこゝには既に夜がある——

やがて彼方の曠野から壊れた幌馬車が
疲れ切つた轍の音をひきづゝて歸へる頃
黒い葬列が灯もなくしめやかに通り
またしても一つの深い闇が下りて來る

春の焦燥

垣しげる

軟かい春の空氣は女の掌となつて
ペエブメントの皮膚を撫でる。
白鼠は果實屋の香高い店先で
空しい音に車を廻す。
奥さん、パアマネント・ウェイブは猛獣映畫の密林
ですね
そこでは蠻人の亂舞が陽炎となりませう。
焦燥！　あの言葉に似た煙突の煙が街の横顔に覆ひ
かゝる。

距離

渡邊中

杣夫の斧に倒れた老木の地響……
その刻、私は彼と對談してゐた。
彼の恐怖は地震よりも猛獣の咆哮よりも烈しかつた
梢を渡る風は眞青で……。
私はうららかな微笑の裡に
都會の人間と山村の人間との距離を感じた。

消息

★會員山崎成美、會友壺谷泉一、江誠馨、誌友松本祐順諸氏應召。祈武運長久。

★新加盟者浦瀬白雨、堀口太平、羽田貞、奈良進、島田磬也、池田日呂志、安田吾朗（以上會員）熾木田美、長谷雄京二、小池亮夫、竹内一、渡邊和郎、吉野多美子、津坂霞、丸山吉三郎、梅澤恒夫、小松茂彦、大山敦五、小田邦雄、上松ちか子、田中國男、牧博美、沖田廸、春山章郎、亀井義男、入江伸、鎌田安雄（以上會友）推薦會員渡邊曠彦、會友江越馨、吉成糸子、誌友略。

★淺井十三郎氏（會員）詩集「斷層」を詩生活社より新刊

★笠井亘氏（誌友）客年十一月逝去、本會より弔辭を呈した

★客年七月、名古屋、新潟、東京、横濱の各地に於て詩文學研究關係の集會あり、梶浦正之氏會友壺谷泉一氏同伴出席。各地とも盛會であつた。

★注意★

- 入會希望者は作品に返信料を添へ會則を請求されたし。
- 次輯より全國同人詩誌の總評をなす。新刊書、詩誌の寄贈を望む。
- 「第一輯」（定價八拾錢・送料九錢）を特價提供す、三錢切手同封申込次第詳細通知
- 次輯原稿〆切　六月十日
- ◎右の通信はすべて下記編纂者宛の事

愛知縣海部郡佐織村勝幡　梶浦正之
（振替名古屋二四八三五）

編輯後記

詩壇は近時表面的に活動旺盛の如くに觀えるが對社會的事業には黨派情實關係が多く仲間褒、默殺等の流行で實蹟は頗る無力である。お互に反省しよう。本會に據る人々でも作品の檢討批判は嚴格に交換したい。尠くとも之の道場的試練を嫌ふ人は吾等の仲間には無い筈、本輯の小生の詩書批評も大いぶ痛い處に觸れたが能く了解して頂けると確信してゐる。

本輯は發行所の變更その他にて意外に遲刊、尙第一輯費用多大にて編輯に多少の壓縮を加へた事等は深く御詫する。これは次輯から順調に改める覺悟、乍然、內容紙質の低下、雜誌的外觀等は絕對に排して飽く迄も單行本的品位は保つてゆく。幸に仲間も增加する傾向濃厚、之偏に本會關係者の熱意に他ならない。本輯發行に關して堀口氏、發送に小林、淺井、桑原、安田、萱原、細川、渡邊の諸氏の甚大なる御支援を深謝する。相互に親睦と琢磨精進とを約して。

（かぢうら）

詩文學研究第二輯

昭和十三年五月十五日印刷
昭和十三年五月二十日發行

【定價六拾錢】

編纂者　詩文學研究會
發行兼印刷者　東京市麻布區霞町一番地　堀口太平
印刷所　詩文學研究印刷部
發行所　東京市麻布區霞町一番地　詩文學研究會

發賣所　東京市神田區神保町　上田屋書店
大賣捌所　東京堂　東海堂　北隆館　大東館

詩集

不器用な村

木下夕爾　最上平八　丹羽哲夫

麗妙な魚介の凍結する季節の氷塔を巡錫するは誰ぞ。三位一体、更に青史に刀痕を認めず、思念の膨脹は漏斗を零れる銀露に似て詩仙の浸透を促す。この鼎のスクラムは透明純粹な三備秀の裸像に據つて支へられた。

既に三束の征矢は弓絃を放れた、雲霞を淺渫する詩天に響つて。降り來るは赫き林檎か、白娥の雪片か。とまれ、陽氣は凝つて蠢爾の妖雲に清碧の特質を顯示し、この宣き嵌接の輪番は詩界の定石を轉じ、溶解する氷塔の魚介となつて昂然と遊泳し始めるであらう。（梶浦正之）

★豫約募集★

百五拾部限定

二色刷　佛蘭西裝滿洒本

定價八拾錢

詩文學研究會版

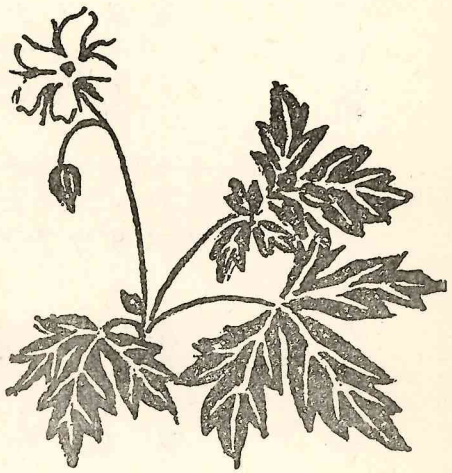
東京市麻布區霞町一番地

カオスの鶴

池田日呂志詩集

折戸彫夫氏跋文の一節

〈カオスの鶴〉の作者は、不思議に言葉の屈折の多いデコレーションの霧の中にその詩想を隠見させる。それは薨の如く重疊する言葉の波の中に搖曳する雲霧となりて深く重り、東洋風な多彩の香に充ち充ちて玄妙な空氣を撒布する。而して人々は此の余りにも多彩な言辭のマヂツクに、聯想のラビリンスに足を踏み入れるであろうが、一歩身を翻して遠距離に位置するとき、忽ち人は詩全体の風貌が、異様な眩暈の奥に有機的に聯關するものを確然と遠望するであろう。誠にこれは不思議な一個の詩風である。



繪挿簽題★夫彫戸折文跋★英重江杉・文序
★入號番定限部十二百刷初行刊★二丈崎宮
容内★本美箔朱方三紙表折洒瀟判菊・裁体
圓壹價定★頁百

★發　行　處★

日本詩壇發行所

大阪府布施市御厨川島廿七　　振替大阪一〇四九〇一番

梶浦正之

詩集

豹

●現代文學の方向と詩の新精神(エスプリ・ヌボウ)を指示する新集!!

〔内容船來白コットン・詩四十三篇・エッセイ「新現實(ネオ・リアリテ)の方向」一章

私は本書に於て、主知的見解に基く新現實主義(ネオ・リアリスム)の立場から、現代人の最大の魅力である處の、かの野性の壯烈な意力と近代の聰明な節度との調和を望み、かへて簡素にして明快なる均整と暴力的な鋭い強い線を以て歌はんことを意圖した。……

（自序より）

〔四六判・カット二葉・佛蘭西裝美本・定價八拾錢・送料六錢〕

●理智主義(アンテクチュアリスム)と野獸派(フォホビスム)との相尅に生誕せる新集!!

東京豐島區長崎東町二ノ六九六

ボンボン書店版　振替東京五五〇九八七

★「詩文學研究」に據る中堅の二名著！

詩集
層斷
淺井十三郎
生活詩社版
1·00¥

詩とアフリオムス
錨投
鹽野保男
寶文館版
1·20¥

★新らしき詩は新らしき人の手に！

取次所 詩文學研究會 東京布麻布區霞町一

★

詩文學研究

第二輯

60 sen